

TZFKS

夏の盛りの夏休み。マジ暑い八月に人集まり過ぎの夏祭り。襟撫えりなが目に涙を浮かべてあああぎやあああにやあああぎやあああ泣いてマジでうるさいししまいには過呼吸になっとなるんで「かして」って、いくらなにしようとか動かないイグアナ人形のいぐちゃんを半ば奪うようにしながら背中ばかって開けて《具穴》って書かれた赤い札のやたら雑な言葉遊びに己が顔にほのかな笑みを浮かべながら札が放散するほの青く光る粒子を読み解き《依》の文字を織り込み《依具穴イグアナ》に綴じた瞬間。コミカルな動きが循環。にわかになんを見渡し歩くいぐちゃんの首を傾ぐ仕草を合図に、ぱっと笑った襟撫はしゃにむに「まーくん、だいすき！」って言った。

夏。小学3年生。まるで舟のように夜にぼうっぽっと浮かぶ月は満月で、睫毛と目頭濡らす涙そのままに笑う襟撫の笑みはとても綺麗だった。

笑顔は呪いだ。

その日から

戻りはしない。元には。

あの日と同じような笑みを常夏じょうなさんのデートでこぼしてるのを見かけて以降

ああ……

と

思い出しては思う。

ああ……のあと。なにもない。なにもないのに。のこる。なにか。灯る。なにか。

心臓とか肺とかすべていろはすみたいにがじゅつとゴミと化す

そんな感じ

「風」が頬を撫でた。「埃」が空中を浮遊する。「ぴちぴち」とりの鳴き声が視界のはしっこでたちこめる。たくさんの「雨」「あがり」「の」「」において「がアスファルトから舞う残暑。

こどものころから。ことばが視える。

空から降る「陽子」が空気中の「原子核」を叩いて「電子」や「ニュートリノ」や「ミューオン」を電離化するシャワーを降らせて失う。カラスを貫通する。

世界はことばであふれてる。

「あじさい」って言う。すると、あじさいたちからばちばち爆ぜる「あじさい」ってことばたちがたちまち、お礼するみたいに青白く光り、活性化する。「あじさい」もう一度言う。青白く光る。

しずかな。いい朝。

「ねーねー真言おー」「ピース」「ねーねーねーねー」「ピースピース」「ねー無視？」  
ヘルプミーって顔でズイツと顔覗きこまれるとつい「なに」と言ってしまう。

「なんか、なにもやってないのに調子悪いの」と四角いスマホを近付きながら差し出す襟撫。

ぼくが修理するのは前提か。

ま。いいや。襟撫はこのあたり天然だ。「なにもやってないって、大抵なにかやってるから」と言いつつサツとすぐに暗黒い手で脱獄。管理者権限を借りた体でプロテクトを外し、隠しプロセスも含めて開陳。あーこれだ。と親プロセスを辿れば……「いた」

《初留守》  
ウイリス

「え、なになに？」食いつく襟撫。気が散るので「はい」ってフリスクで釣りつつ、振り向く隙なく火を吹くぼくのスキル群。

続々と増殖する《初留守》をフリック。《果つる種》に書き換えて無傷のまま無事潰す。

「やっぱ感染してた。っーかこれ。エロサイト由来……」

「へー」画面を覗き込む。襟撫のつむじ。

「へーって」

「ん？」ふりかえる。

「や。たしかに間違いつてわけじゃないけど。恥じらいが足りないんじゃないかい」

「え！」いそいで通学路を見まわす襟撫。「……誰もいないけど？」

「や。ぼくがいる」

「あはっ」のけぞった拍子にふんわり弧を描くながい髪。「いやいやっ真言はいいし！」  
「え。なぜ」

「だって」目尻をぬぐう。ウケすぎだろ。「エロサイトつてもなにも、知らないでしょ？」

真言

「いや知ってるよ！」

「じゃ」すつと近付くひたすら悪戯っぽいはにかみ面。「なにがあるの？」

「それは……女性の裸とか」

「とか？」

「……男性の裸とか」

くすつ。「じゃ。わたしがそれ見てたら、真言はどう思う？ みんながどう思うかじゃ

なくて、真言は、どう思う？」

考える。

「とくに。どうも」

「でしょ？ じゃ、なにを気にする必要があるの？」

言われてみれば。そうか。

そうなるか。「襟撫は賢いな」

「えへへー」

と、襟撫の口から飛び出た「えへへー」がびよんびよん跳ねて道の向こうへ駆け足で去っていった。

「もしかしていま。本気で照れてる？」

「う。うっせ！」

おはっ。背中叩かれて一瞬。止まる息。

……ま。よしとしよう。

「ま。じゃあ。ぼくはいいけど」スマホをわたしながら言う。「控えめにね。彼氏ができたんだし」

止まる。

止まった襟撫の消えた表情。「知ってたの？」

「うん」

「そ」

「うん」

黙る襟撫。溜まっていた気持ち。うまく言葉にならず経過する時間。口をついてでる

「よかったね」

「あっそ」

ぼくの手からスマホをとってすたすたと去っていく。

182

ずっとこどものままならいいのに

って。

こどものころのぼくたちは男も女もなくどの子もこどもだった。ぼくは真言じゃなくてまーくん。襟撫も襟撫じゃなくてえりなで、りなっちだった。よっしーとこんちゃんがいて。ジャミラがいた。先生は青山先生で、ブルドッグに顔が似てるのと青から、影ではブル山とかクソブルとかクソブルクソとか呼ばれた。ひどい。でも。たのしかった。

中学。高校。上がるにつれ、ぼくたちは三種類に分断する日々。

三種類？

ちがう。

でも。とにかく。ぼくたちはぼくたちのうちのだれかのことばかりがなぜか気になったり、好きになったりした。告白したり、されたり、真っ赤になったり、なられたり、付き合ったり、キスしたり、セックスしたり。した。たぶん。

ぼくだけ。あのころのまま。こどものまま。

ぼくの意味を決めるのはとどのつまりぼくと周りとの異なりだから。変わらないぼくはだんだんと異なっていく。

もう。ない。あのころのような。世界の成り立ちとか。物理学とか。ことばと世界の関係とか。ワクワクしながら考えて。笑って。えりなに熱っぽく語って。こんちゃんやジャミラに「すっげー」って言われて。先生や父さんに褒められる。そんな日常は。もうない。

ぼくら人間はタンパク質とかの塊でタンパク質は高分子化合物で分子は原子で構成されて原子のなかには原子核と電子が含まれて原子核は陽子と中性子でできて陽子とか中性子はクオークできてクオークはアップにダウンにチャームにストレンジにトップにボ

トムがあつてこれに電子、ミューオン、タウオンとそれぞれに対応する3つのニュートリノの計6つのレプトンを足してフェルミオンでそれから光子やウィークボソンやグルーオンやグラビトンやヒッグス粒子がボソンで SUSY や第4世代フェルミオンまであつて？笑止！もう無理素粒子多すぎ！なんてはしゃいでた。あのころ。などもう。ない。

いぐちゃんをいくら直しても。もう襟撫は泣きやまない。定石から先がない。でもほかにやりかたはない。じゃあなに。確かじゃない。立場はない。埒が明かない。先がわかんない。なにかはない？

いや

なにもない。

246

「となり、いいかな」

つぎは、体育。五時間目。ドツヂカリレー。どっちだっけ？ 考えつつ学食でひとりカレー。食つてると常夏さんの問い掛け。

「え。はい」

となりに腰掛け。それだけ。左右を見渡し首を傾ぐ。テーブルに置いた手。とりあえずスマホで解きかけの文字化けをこじ開ける。パズルを仕上げ。黙々と。もぐもぐと。カレーを食う。

すみのほうの女子が目をこちらへちらちら向けては押し合つて笑う。もしかして常夏先輩の噂。かな。イケメンでサッカー部でキャプテンでエースでストでライでカーで。とくれば。どうしたつて女子がほっとくわけがない。

左右を見渡し首を傾ぐ常夏先輩。「真言くん」切り出す。「知ってるかもしれないけど、俺、すこし前から襟撫と付き合つてる」

「あ。はい。知ってます」

「で。報告しようと思つて」

「え。なぜ」

「なぜ？」

「なぜ。ぼくに報告を？」

たちまち目の前に現れたハエをまじまじと見つめるように驚いた目でぱちぱちとちらをみつめる常夏さん。「ほんとにそうなんだな」

「あの。話が見えない。です」

「きみは襟撫の幼馴染みだろ」

「はい」

「陰陽師でもある」

「いや」ちがう。「陰陽師なんて大仰にすぎる呼称。もうとうになくなりました。ぼくはただの《言葉遣い》です」

「そうなの？」

「はい。昔はいろいろありましたけど。魔術師とか錬金術師とか霊媒師とか陰陽師とか。ぜんぶ平等に《言葉遣い》に統合しまして」

「なるほど。そういう仕組み」

「です」

「でも。特別なんでしょう？ 言葉遣いのなかでも。そう聞いたけど」

「襟撫からですか？」

「うん」

「……べつに。特別というわけでは。先祖が代々陰陽師だったんで、過去の蓄積とか、英才教育とか、そういうのがあっただけです」

「すでにかなり上位だとか」

「あの。本題はなんですか？」

「あ。うん」

いつも軽妙洒脱で明朗快活な常夏先輩に毛ほども似合わず、警戒を匂わすように瞑目し黙る。

学食の喧騒がやけにとおく見える。

「ん。言う」常夏先輩が顔をあげる。「襟撫はきみのことが好きだった」

「それは何度か。襟撫から聞きました。でも——」

「わかってる。きみたち言葉遣いは恋愛感情や欲望を制限されてる。誰かを好きになることはなく」

「です。一般の方と比べてもつってる力に差があり過ぎますから。力を制御できなくなる

ような欲望や感情はカットされています。だから。よかったです。襟撫の彼氏が常夏先輩でしたら安心ですから」

「ほんとにそう思ってる？」

「え？ はい」

「そっか」溜息を吐く常夏先輩。「ま、いいよ。わかったことだし、俺にとっては都合がいい……んだろう」眉をしかめて言う。「じゃ。俺と襟撫が付き合うことにきみは賛成してくれる。ってことで。問題ない？」

「問題ないです。むしろ襟撫にはこの先ないくらいもったいないくらいです。ずっと。思ってたんです。いい人どっかにいないかなって。襟撫には幸せになってほしいので」

「ふうん、いい人なんだね、真言くんは」

にっこり笑う常夏先輩の眉間がびくりと痙攣する。

「なあ、真言くん」

「はい」

「俺はてつきり、きみも襟撫のことが好きなんだと思ってたよ」

「や。だから」

「だってどのくらい確かなの？ それ。俺、よくわかんないんだけどさ。倫理化だっけ？」

「《倫理化》です」額に手をやる。

「そうそれ。それがどういうものか知らないけど、たとえば恋愛感情を100倍に薄めるとして、100倍の気持ちがあればどっこいどっこいになっちゃうわけじゃん？」

「そういうものではないです。脳内に論理門を作って特定の信号をシャットアウトするんです。検出効率は99.99999999%。その閾門を九十九回ループします。意図的に改竄もしない限り、通過は不可能です」

「改竄すればいいってこと？」

「意味。わかって言ってます？」

「ぜんぜん？」

これだから。「世界最高レベルの言葉遣いが何年もかけて構築したセキュリティを突破するなんて、現実的じゃないですよ」

「でも、きみ陰陽師なんでしょ？」

それで。陰陽師。

「ぼくにはぜんぜん歯が立ちません」



「ほんとかな」

「ほんとうです」

なんなんだ。この人は。

「あの。結局どうしたいんですか？ ぼくが襟撫のこと好きだったら。なんなんですか？」

「なにつて。付き合えばいいんじゃない？」

「先輩はそれでいいんですか」

「いーわけないよねーでもいーんじゃない？」

意味がわからない。

なんなんだ。

「ああ。なんとなくわかりました」

「ん？」

「怖いんでしょう。ぼくが」

「は？」

「べつに心配要りませんよ。ぼくが身勝手にも怒って常夏先輩を千回も毒殺して亡者にする展開とか、襟撫陛下の男勝りな心に手え加えて心変わりさせるのを警戒していらっしやるようですが。ありませんから。そういうの」

常夏先輩の青い顔に浮かんだ「汗」にぼくの顔が歪がんで映る。「へえ、やれば？」

震えてる。

なにを。やってるんだ。

馬鹿なのか。

「……すみません。調子に乗りました。ぼくは韻遣いではないので。安心してください」

「や、いいと思うよ。全然。やれば？」

「やりませんし、できません。日本国民は年に一回、予防接種でファイアウォールを張られてますし。許可なく破れば瞬時に世界中の言葉遣いがぼくを始末しに来ます」

「……ま、どうでもいいけど」席を立ち。肩に手を置く。「ごめんね。さっきは」

でもやっぱりきみは襟撫のことが好きなんだと思うよ

と。呪いのようなことばを残して。去っていった。

肩に置かれたそのことばは大袈裟なほど震えていて。

それがとてもうらやましかった。

281

笑止！もう無理素粒子多すぎ！って思うじゃん？思うじゃん？でも面白いのはこっからで、あるとき人類は気が付いた。何種類もある素粒子を統一的に記述できるもつと基本的な要素を扱った理論が可能だつて。それが超言理論。昇天しそうなくらい超便利そうでしょ？量子力学のコペンハーゲン解釈では「観測によって波束が収縮する」とされていたけど肝心の「観測」の意味が曖昧だった。超言理論はここに答えを与える。内語も含めた「発話」によつて波束が収縮するはずだ。それが超言理論の主張。なぜ発話つまりことばが波束を収縮するかというと。素粒子がことばだから。超言理論はすべての素粒子が「ことば」として記述できるとする。相互作用は粒子の交換だから、ことばとことばがことばを交換しあつてゐる。みたいな描像。粒子を観測したときにぼくたちのなかにはことば＝粒子が生まれる。これを時間反転すれば粒子の衝突として表現できるつてわけ。もつとも内語を含むぼくたちのことばは粒子同士の相互作用によつてあたかも粒子のように振る舞うフォノンのような準粒子に過ぎないわけけど。だから「発話によつて波束が収縮する」んじゃないくて、「波束の収縮によつて発話が生まれる」と言つたほうがいいかもしれない。因果律的に等価だけど——つて暴走気味に滔々ととめどなく喋るぼくを止めもせず、これといつて内容もろくに理解できなくてやけに嬉しそうに聞いているえりなの顔がもつと見たくて話し続けたあのころ、ぼくはえりなのことが好きだったんだろうか？

つて考える。そんな筈はないのに。

欲望と執着が人を変え、思想さえあれば踏みとどまれるはずの倫理の境界を踏み超えさせる。あとに残るのは後悔。そうはいつても生涯にわたつて全人類の欲望を詳細に除外するほど言葉遣いの考えは狭隘じゃないけど、強大なる者としての境涯を考慮して、自分達の欲望は封印した。それが《倫理化》<sup>エチカ</sup>。言葉遣いは繊細かつ無情なほの甘い恋愛感情を抱くことはない。

でも。

だとしたら。なんで。

ぼくは常夏さんを脅したんだろう。  
脅せたんだろう。

あつてはならないこと。その気になれば言葉遣いは一瞬で人を殺せる。言葉遣いが目の前で韻を踏む——それは銃を突きつけるのに等しい。

《倫理化》<sup>エチカ</sup>された人間にできるはずがない行動。  
なのに。

332

つまり陰陽師は要するに当時の科学者だったんだよ。ことばは可能性を収束させる。それが自体が相互作用して現実を変える。陰陽師たちはそれを知ってた。その当時はほんとうに鬼も神も式神もいて、いまとは異なる理<sup>イライ</sup>があった——いや。陰陽師たちが理<sup>イライ</sup>をつくった。ことばによつて。それから段々と西洋の思想や科学が流入してきて文法と語彙が変わり。世界が変わった。鬼や八百万の神や式神は消えて、かわりにことばは分子や原子や素粒子の形をとるようになった。でも。本質は変わらない。相変わらず世界はことばでできていて。ことばは人の心のなかにことばを生み。ことばは世界と相互作用する。科学者は世界の法則の発見者じゃなくなるかわり、世界の法則の創造者となった——

目を覚ます。ふるえるスマホ。つかもう昼？ 画面には襟撫の番号。なんだよ。

『真言くん、襟撫が！ あああああ！ 襟撫が！』

スピーカーから常夏さんの神経質に惑乱した声。襟撫？ 《逆端地》<sup>リフレイクス</sup>で常夏さんと位置<sup>エリア</sup>を入れ替え。《砂紋》<sup>サモン</sup>を描いて常夏さんを召喚。

すぐに鼻をつく臭気。

焦げたゴムと鉄のにおい。折れたポールとべつの気持ち。道路上に毒のように黒く残るタイヤ痕。飛び散った血や臓が暇そうに火纏う。ひしゃげたバンパー。見上げた眼窩。目が合う。襟撫と。これはだれのせいだと。問うのは。君じゃない。嘔吐は。意味がない。四肢がない。完全には。「し、死なない」歓声があがる。常夏さんが差し出す。襟撫の手。

「言葉遣いならどんなことでも、できたよねえ！」

くびを振る。横に。

「死んだ人間を生き返らせることはできません」

叫ぶ「声」。おちる「涙」。ぼたぼたと。常夏さんが握った襟撫の手は小刻みに震え。常夏さんはぼくのかわりに二倍泣きじゃくる。コンビニに突っ込んで傾く大型トラックの空回るタイヤを背に。醜く目を腫らし。奇声をあげ。涙と鼻水を垂らしながら襟撫の手を抱きしめる常夏さんを見てなんでぼくはこうなれないんだろう

367

何日経とうが。

あの眩むような惨状に無惨とか恨むとか単刀直入でまっとうな感情はちゃんとは湧いてこないようだった。ただうだるような暑さのなかで普段どおりフラットで無感動で単調な感情を反響のないがらんどうを塞ぐようにまずそうにカウントし通した。

トラックに悪意がないことだけはたしかだった。悪意も粒子だから。ことばだから。襟撫の身体のどこか一部とでも因果線を結ぶなら。検知できる。検知した瞬間にぼくと位置を入れ替える。そう。スクリプトを組んであった。だから。

悪意がなかったから。襟撫は死んだ。

葬式は。焼香だけやって誰にも見つからないように帰ろうと思った。

でも。

「真言くん」呼びとめることばに呼びとめられた。

襟撫のお父さんと

常夏さんがいた。

赤く腫れた目。整った顔が大きく崩れていた。別人みたいだった。

「この度は。ご愁傷様です」他人事のように言うぼくの綺麗な目。この人は軽蔑するだろうか。

「うん」目。きりきりと痙攣するこめかみと口元。お父さん。一瞬。怒ったのかと思っただ。涙を我慢したみたいだった。

「真言くん、君に渡すものがある」

「渡すもの。ですか？」

「いますぐに渡せるものじゃない」それからすこし言い淀む。「……襟撫は、君のために、卵子を残していた」

「……卵子？」

うまくのみこめない。およそ。この場ともっともそぐわない言葉と思えた。

「君たち言葉遣いは、恋愛感情も性欲も持たない。だが。子孫を残す必要はある」

「ああ……」

そうだ。あれだ。ぼくも。そうやって生まれた。ぼくには父親しかいない。正確には母親もいる。けど。知らない。父さんは卵子提供を受けて人工子宮でぼくを生んだ。通常は卵子も言葉遣いが提供したものを選ぶ場合が多い。逆も同様。ただもちろん。一般人が提供することも可能――。

思いつく。小学生の頃。襟撫はよく言っていた。「まーくんのお嫁さんになる」って。言葉遣いは結婚しないから無理だと言っても。ぜんぜん聞かずに笑っていた。

吐きそうなほどグロテスクだ。

「お嫁さんになりたい」って子供の願いは。こんな風の実現するのか。死んで。そのあと。卵子だけが残るのか。

気持ちが悪い。

そう感じるぼくは。異常？

だけど嬉しいぼくは。異常？

だけど

「受け取れません」そう。「ぼくにその資格はない。受け取るべきは。襟撫が最後の瞬間に好きだった――」

振り返り向いた瞬間。「真言くん」腕を掴まれる。うまく血の通ってない青い手。冷たい手。

常夏さんの。「それ以上は」「殴りたくなる」「それを受け取るべきなのは」「きみだ」

まるで

襟撫の好意と卵子をぼくと常夏さんとお父さんで押し付けなすり付け合ってるみたいだった。傍からはそう見えたかもしれない。でも。そうじゃない。わかっている。三人とも。

勝者はぼくだった。

くだらなすぎた。

文章には垂直方向と水平方向がある。あ。横書き。たとえば「犬が吠える」って書く。水平方向には「犬」の次に「が」が来て「吠える」が来る。文章を成立させる単語の連なり。これが連辞——サンタグム。一方垂直方向は「吠える」のかわりに「歩く」や「眠る」でもよかったはずだし「犬」のかわりに「人」でも「ぼく」でも「水」でもよかった。文章に現前しなかったことばの可能性空間。これが範例——パラダイグム。

ぼくは

きれいなつもりだった。

《倫理化》<sup>エチカ</sup>のおかげでぼくは性欲も恋愛感情も持たない。だれかを汚すような欲望も、自分を見失うような感情も、持たない。だれより正常で清浄で影響を与えない。空気のような存在のつもりだった。それが義務なりと思っていた。じっさい義務だった。いつからか、世界を脅かすほどの力と、崩壊寸前の世界の存続に必要な不可欠となった言葉遣いが、自らが制御できないような欲望や感情をもつたら、どれほどの混乱と、見るにたえない地獄が待ちうけるか。わかりきってる。だから。いまなお。ぼくは正しい。

すべてがことばでできてるこの世界では、サンタグムは事象のつらなり——因果律に対応し、パラダイグムは現前せず潜伏する事象の空間——可能世界に対応する。

意気揚々とことばと物理の関係について語っていた中学生のころ。襟撫はにこにこ嬉しそうに聞きながら、卵子を残していた。自転車の後ろにのってぼくに抱きつきながら、卵子を残していた。何度も「好きだよ」ってぼくに確認するように言いながら、卵子を残していた。

言語物理学では、ことばをシニフィアンとシニフィエに分ける。シニフィアンはたとえば「犬」という文字や音声。シニフィエは「犬」という文字や音声<sup>が</sup>指し示す意味内容のこと。

これは美談だ。ぼくたちの常識では。卵子を残した襟撫も。卵子を残させたぼくも。涙がでるほど。正しい。くそくらえ。

通常、言葉の水平方向の連なりと垂直方向の選択を規定するのは、意味内容。シニフィエ。シニフィエのルールこそが言葉の法則つまり物理法則そのものになる。たとえば「I am Tom」と「わたしはトムです。」という文章は、シニフィアンは異なるけどシニフィエの関係は保存してる。これは異なる系においてもシニフィエが保存量となることで対称性が生ま

れ、言葉の法則——言理言則を形成してることの意味する。

ぼくがなにを失ったのか。それは見えない。

最初から失っていたぼくには、恋愛とか、性欲といったものがどんなもので、どんなふうに抗いがたくて、どんなふうに汚いのかすら。じつはよく知らない。

だからぼくはそれがどれだけの損で、どれだけの得なのか、わからない。

だけど。言葉遊びでは逆転する。たとえば《狂犬猫》<sup>クレイビース</sup>という言葉遊びは、もはやなにを意味してるのか、定かじやない。というよりなにも意味していない。言葉遊びは意味内容を欠いたことば——シニフィエなしのシニフィアンをつくる。

恋愛感情や性欲をもつてる人は。各々が勝手に。自分の基準で。うらやましいとか。かわいそうとか。いつてくる。そうなのか。と納得する。そうなのか？と疑問に思う。

シニフィエをもたない《狂犬猫》<sup>クレイビース</sup>はシニフィエのルール——つまり通常の物理法則——にはしたがわれない。したがえない。したがうシニフィエがない。それはシニフィエのルールからはなれてふわりと浮遊する。完全に自由に、ではない。たとえば《狂犬猫》<sup>クレイビース</sup>に「猫」が出てくるのは「病」<sup>ビョウ</sup>と発音が共通するから。そこにはシニフィエのルールのかわりにシニフィアンのルールがある。言葉遊びではシニフィアンこそが言葉の連なりと選択を決定し、しかもシニフィエをもつほかのシニフィアンを巻き込みながら、ときにもちあげながら、浮遊する。意味は後退し、言葉の字面や音声と言理言則を変える。だから。言葉遊びは通常の——シニフィエの——物理を超えた現象をひき起こす。因果律と可能世界にアクセスする。だから

ぼくには

襟撫の苦しみが理解できない。いまになっても。

だれかを好きになるってどんな感じで。好きなひとに親友って言われたらどう思っ

「ほかの人を好きになった方がいいよ」って言われたらどんな気持ちになるのか。

わからない。

言葉遊びは万能なんだ。

なにが万能だ。

ぼくにはなににもできない。

ぼくにはなににもできなかった。

「深夜のグラウンド」

まっ暗闇のなか。吐き捨てたことばが染み込んだ瞬間。グラウンド全体がぱつと青白く光る。

風になびく黒の狩衣。指貫をはたいて埃をはらい、白線引きを立て置く。

目の前には光る巨大な陣。その向こうに校舎。

なあ襟撫。おぼえてる？

こどものころ。ぼくが毎年夏休みより長い期間、京都にいたん。言葉遣いとしての修行のために。ばあちゃんちに。あの年。襟撫があんまり泣くんで父さんと襟撫の両親が折れていっしょにばあちゃんちで過ごしたあの3ヶ月間。夏祭り。おぼえてる？

まーくん、だいきき！

おれはおぼえてる。

笑顔は呪いやな。

なあ襟撫。

おれはいま。正しくないことをしようとしてる。

おれはクズになろうとしてる。

これはほんとうに。いろんな意味において正しくない。

でも。いいかな。と思う。

べつに。

恋愛感情に憧れてるわけじゃない。ましてや性欲に。せやから。これは目的じゃなくて。

手段。

ま。

ええか。

ごちやごちやと。

だれに説明しとんねん。

やることきまつとんのやったらスパッとやってまえ！

ボケ

「おーし」

常夏さん。あれ。嘘です。「世界最高レベルの言葉遣い」なんていません。言葉遣いに序列なんかありません。だって。思い付いたものがすべてを左右するんだから。結局。運



です。言葉遊びは偶然の産物なんです。つねに。もちろん訓練することは出来ます。でも。やっぱり運なんです。だからほんとうはみんな遣えます。

ぜんぶ嘘です。《災厄の日》。ことばが世界と相互作用すると科学的に証明されたとき——50年以上前の話——そんなときは世界そのものがぶっ潰れかけました。だれもが好き勝手に世界変えようとしたから。せやから。一部の人間が人々の記憶抹消して。言葉遊びで言葉遊びに制限を掛け。言葉遊びを独占し。自分達の欲望とか過度な感情を封印しました。

それが。《言葉遣い》。

それが。最初の間違い。

それが。この世界。

もうええやろ。ええかげん。

な？ ぶっ潰そ。

なあ襟撫。お前がなんや人形やらスマホやらPCやら毎回毎回壊すから。得意なつたわ。

他者の言葉遊びのコピーと改変

本歌取りの《言葉遊び》——

《本歌 鳥居みゆきソング・ブック  
鳥居 居》

途轍もない暴力。ま。言葉遊びは大概そうやけど。

人差し指と小指。立てて頭の両側に当てる。脳の奥深く。生まれた瞬間から仕掛けられた言葉遊び

《倫理化》

ちよーつと

ズラしますよー

えいえいっ

ガシャコーン

こんには、チンピラたち

《淫靡化》

なはは

アホやなあ

襟撫

さいご、だれのこと好きやった？

ほほ

きよったきよった。

ボケ。

グラウンドの向こうから。

言葉遊びで飛んできた残滓かきらきら青白い光を纏う。

女と男。

「ふたりか」

さっきの《淫靡化》<sup>エッチカ</sup>ははっきり察知して即刻飛んできてバツチリ殺しにきよったボケが。 たったの。ふたり。

ほほん？

「どう思う？」きいてみる。

ひとり黒髪に覆われ、前髪も後ろ髪もつま先のとこまでとどかせてる女で、地を突き刺すような髪の間隙からぎよる目を覗かせ、どこまでも愚かねって感じのともさかりえの面影みたいなほのかな笑みを浮かべ——しらんがな——吐いたことば、勝手に、シャツフルして糸の流れに「《乱流糸》<sup>しらんがな</sup>」

「あ？」

糸。糸。糸。張り巡る。糸。ぴん。弾く。女の白い指。気配。右手引く。小指飛ぶ。ぴん。首を曲げる。かすめる。こめかみ。血が噴き出す。速攻。殺す気か。「《血糸縛》<sup>チートバケ</sup>」糸のコントロール奪って逆に女を縛る。「まず名を名乗れよ」

「名を名乗れよ？」白髪七三分けの男が動く。「アホなボケよ。なあ気付いてる？《顔がとれそう》」

残ってたらしい糸が顎から飛び上がって額までの肉を削ぎ落とす。

くそ痛え

「《顔面讐復》<sup>フェイストレイス</sup>」顔を治す。女を指差す。「アナグラム遣いと」男を指差す。「韻遣いか」

「《透迷子》<sup>じごめい、じご</sup>」アナグラム遣いの女が透明度を上げて消失。縛っていた糸がほどける。

「《透視神託》<sup>オウラ・ルツク</sup>」で。名前は何？」

「言ってみたとこで死んでしまったら意味ねえが。ええわ。教えたるわ。まずは」男が指差すは女。「奴は名倉編だ。それがわかるか！ わかったら死んでみなカスが！ 維新的なアウラ。纏う《要 円》」男が妖艶な陽炎のトルネードに包まれとるね。  
男を指差す。「で。君の名は。」

「OK。名乗りますよ。俺の名。三三三三三。《倫理化》解錠、聞きつけて急ぎ参上。挑みますよ？」男が猛炎を纏いながら躍りかかる。

「どうぞ勝手に己が炎にまかれて死ね。《晝 焰》」で派手にオーラの燃焼を全焼。「あら。死んだん？ 嵐人中。あらら堪忍やん。」

女が息を吐く。《疾風塵外》息吹で火が消える。なんや邪魔やなアナグラム女。  
「名倉編」指差す。「まずは難儀な君を潰す。役立たんしな。計画も狂う」

《墓穴露呈》突如。足元に大穴があく。あこら。ひとりん学校になにしてくれとんねん。ひとりごちながら落ちながら男を指差す。「三三三三三。お前は生かす。役立つから」

呆れ顔で見下ろすふたり。「いや。もう。お前おわりだから。もがけよ。泣きながら。ついでに埋めといてあげるよお前の亡骸は。ほらね《古代墓場》でめでたしめでたし」

あ。ダメだ。ぼつてりとした墓石が飛んできて狙撃する間もなく穴塞いで固定。ダメだ。殺しちや。名倉編は遣える。三三三三三は遣えない。どうしよ。ま。とりあえず。やる。墓

石か。このまま封印する気かな？ 穴にみっしりと嵌まりし墓石を破壊してもいいんだけど単にだりいし。《卵子借り》で采配第二総合病院の管理下にある襷撫の卵子を手近に取寄せる。凍結保存されてるケースの中身を「《察知》」よし。ちゃんとする。

唱えるはインスタントな真言。なんとなれば言葉遊びは即興性が大事だから。ことばの寿命は短い。文脈の奔流のなかに現れては消えることばを掴んではつぎのことばに繋げ

——踏めば消えるタイルの敷き詰められた橋をいっきに走り抜けるように——その場にあるものを寄せ集めるブリコラージュ。それが言葉遊び。やから。

「なだらかな浅間山が狭間。墓穴まばらな墓場からざわざわだかまった邪な同胞。

高天原から逆らった仇。凶々な輩。蝦蟇はがやがや。花々が騒がん波乱がさなか——彼方からやわらかな伽羅が香さながらわざわざアヴァターラ現さんあなたさまがたはナタ？ ヤマ？ 釈迦？ アラー？ はたまた田中彼方？ まさかな曼陀羅。じゃあなんやギヤラ払わなあか  
んか？ または勾玉？ ワツバ？ 看過は叶わんか？ ならば構わん。端から生半な技なら歯が立たん。我が名はマール。荒業はばからん。鞘から出さんはたたら場からかつぱらったあらかたかな刀。チャカ。雨傘は花柄——」口から溢れ出ることばは青白い燐光を放ちながら弧

を描いて襟撫の卵子の入ったケースにするすると吸い込まれていく。と。突如。ぐわり。という音とともに暗闇に光が差す。見上げると頭上の墓石が動いている。

隙間から見える。三三三三の目。血走ってる。気付いたらしい。なにかヤバいと。

「はは。なかなか馬鹿じゃなかったなマザーファッカー！」

「すぐに殺すぞ」三三三三が名倉編に目配せする。

「じゃかあしやあ馬鹿が！ まあまだまだmana溜まらんからちやちやちやちやか戦ったらあ！」

「《鉄玉》」墓石のさらに上から巨大な鉄の玉が降ってくる。んだろうな。たぶん。見えんけど。青白く光る「鉄玉」ってことば、墓石ガンガン突き抜けてきてるから。

懐からとりだす呪符。どーれーにーしーよーおーかーな！ 《磁杯》。これでいこ。いま。口は中断できない。真言プロセスにつかっているから。心のなか。内語でルビを打つ。

《磁杯》

鉄玉を弾き飛ばす腕状の磁界。

青白い「鉄玉」のことばのシャワーが遠ざかる。よし。

響く。三三三三の声。

「目標。これ以上の詠唱防ぎきる。ミッション開始。《詠唱廃棄》」

「あーやば……」

わかる。

これ以上しやべれば。噛む。あ段か「ん」以外のことばを吐いてしまう。くだらん技だが。くそ。いまは効果がでかすぎる。そうか。これが。メタスキル。はじめて見た。言葉遣い同士の戦いは手探り中。「学ばなあかん」って言いたい！けど言ったら噛んでまうしフリーズ。鬱陶〜。マジで。

「標的はコピー系らしい。これ以上手の内見せん」三三三三の声。おせーよ。バカ。おれにメタスキル見せた。その時点でもうおしまいだから。おまえら。すでに用意完了。始末の仕方は。それはともかく。なんとかしないと。《詠唱廃棄》。書き換える。えーと。どーしたらえーかな？えーとえーとえーと。ぬはっ！おっしや！対策できた。やべえな。発明や。完全やと考えた？あんねんなあ。弱点が。

三三三三の韻遣いをコピー。一部韻だけ取り出し……

スベルミス  
《詠唱廃棄》

←

捨てるミス  
《erou廃棄》

a 以外の母音を捨てる。これでおれはミスできない。「しゃあ！ じゃあまたじゃんじ  
やか乱打やったらんかな」

真言再開。「《経蔵断械》<sup>ラカンカッター</sup>煙草の煙のようにおれの口から漏れ出ることば。雷雲のよう  
にビカビカ光りながら墓穴の隙間から這い出し、膨れ上がり、穴を塞ぐ墓石を包み込む巨  
大な機械になる。さまをイメージする。外では、実際そうなってるはずだ。《経蔵断械》<sup>ラカンカッター</sup>が  
墓石を切断。四方に勢いよく排出する。石にぶつかって死ね。

「《失虚石通過》<sup>つうかしのこいし</sup>」上から声が聞こえる。対処したらしい。  
まあいい。

役目を終えたことば「《経蔵断械》<sup>ラカンカッター</sup>」が卵子の入ったケースに吸い込まれるのを見届けて、  
墓石が消えてぼっかり空いた空を見上げる。いる。ふたり。三三三三。そして。名倉編。  
名倉編の着てる白いワンピース。したから見ると、浮き上がってる。覆う黒髪といっし  
よに。膨れ上がるように。ん。むね。胸だ。滝の途中にある巨石のように、黒髪の流れを  
遮り、曲げてる。おっぱい。だ。案外。巨乳。だと見てとれる。おもわず見惚れる。  
なんだろ。奇妙です。飛翔せる。ずっと見ていたい。って感覚。潜んでる。目に。眼球  
に。いままでどんななにも感じなかった。探究心。触覚よりも透過する感触。

……はともかく。

そろそろ墓穴も飽きた。出るか。「《翔還》<sup>サマナ</sup>——」

「出すかアホ」三三三三の声。「うざいくらい無駄に食らいつく怪物を排出して倍する

《言葉遊び》を蓋にする——《巢韻》<sup>スライム</sup>」

三三三三の口からどぼどぼ出ることば——《巢韻》<sup>スライム</sup>——が青白く光りながら蜘蛛の巣の  
ように穴を覆う。ぬちゆるん。ぼたっ。ぼたっ。青く透き通ったゲル状の物体が落ちてく  
る。きしょ。よける。1。2。3……10体。韻を踏むごとにスライムが降る巢。てか。  
ウザいな。とりま、武器かな。触りたくないし。

「ハンマカンマハンマカンマ《鎌と槌》<sup>ハンマカンマー</sup>」

ことばが分裂し、両手の平に収まり、鎌と槌となる。——と同時に頭上の《巢韻》<sup>スライム</sup>から  
ぼたらぼたっスライムが落ちてくる。おれの韻もかい……。うっぎ。

「《番傘》で傘をさし、《鎌と槌》で蹴散らし、「《山姥》を召喚して対処して  
もらってる間に対策を考える。ふんふん。よし。これでいい。」

唾を吐くように「《穴裂》を《巢韻》に投げつけ穴をまず穿たん。したらすかさず、空白  
の札と筆をふところから引き出し、ふわりふるって筆記するは、蓋のうえのふたりめがけ  
登攀し飛び出すための《登韻》。

「墓から穴からジャジャジャジャーン！」  
出た。ついに。三三三三と名倉編と同じ地平に立つ。

おれの攻撃を警戒してか、ふたりは飛び退る。名倉編の巨乳が揺れる。

暗闇のなか、言葉遊びの青い燐光だけを頼りによく見ると——凸状の突起がある。名倉  
編の胸。ブラジャーをしていない。え。なんで？

よくわからない。が。そういうこともあるんだろう。あるのか？ わからん。でもま：  
…ん。まてよ。とすると。もしかすると。下も？ 下も。はいてない？ というこ  
とも。あるの？ ん？ ん？ しまった。穴にいるあいだに見とけばよかった。穴。  
——ってすごいこと考えてるな。いま。おれ。

なるほど。

これが性欲か。

これが。あの。みんながやいやい言ってた。うわさの。かの。

性欲か。

性欲なのか。

そっかー。

なるほどね。

おっぱい

「《三天の波》おげっ

「《七悪魔》飛んできた衝撃波を七柱の悪魔でとめ——あれ？「あがはっ！」

暗転。一瞬。目を開けると情景が高速回転。気付くと地に倒れ伏した。衝撃波をもろに  
受けた。ようでした。咳き込み、地面をみると吐血。肋骨も何本か。くそ。「シヤア、謀っ  
たなシヤア！」

ダメだ。完全。おっぱいに魅入られたかのように見入って、集中が切れてた。《七悪魔》  
などと、言おうとしていた。真言中なのに。《捨てるミス》で a 以外の母音を強制的に捨て  
てなかったら、いままでの真言がすべておじやん。あほか。ああ。ほんとに。なんなんだ。

ありえないミスだ。こんなの。馬鹿じゃないのか。

これが。性欲か。生まれて初めて味わう欲望をどう制御すればいいのかも、皆目、わからない。どうする。

まあ。

だったら。

消せばいい。

おっぱいを。

立ちあがって手をかざし唱える。

「ナーガラージャサラマンダーバーナー 蛇王炎 殺黒龍波」

三三三三と名倉編。まとめて闇の炎で焼き尽くす。いかなおっぱいとはいえ、焼き焦がしてしまえば、さすがにおれの性欲も反応せんだろ。《淫靡化》で増幅してるとはいえ……

あ

ダメだ。

想像しただけで勃った。黒焦げのおっぱい。いい。すばらしい。

かすかすの炭かすになったおっぱいを右手でばすと握りつぶしたい。

……どうにも。やっぱりかなりやっかいな性欲持ってるらしい……。おれ。

どうしてこうなった。

ま。いつか。

なってもうたもんはしゃあない。

さて？

心のなかで（グラウンド）と発話して、内語の粒子を地面に飛ばす。どうなったかな？さすがに殺してはないと思うけど。グラウンド全体が活性化して青白い粒子を無数に放つ。

正面には黒く炭化した塊。あちゃー。死んだかな？これ。あれ。でもひとりか。もうひとり？てかこれどっちかな？わからんな。髪も焼け落ちて。あ。胸のふくらみがない。じゃあ三三三三か。名倉編は？隠れてもわかる程度の粒子は出るはず。見ると。

三三三三の黒焦げた頭部から「名倉編」ということばが数個。漏れ出してる。ん？

ぱかっ

と三三三三の口が空いたかと思うと、舌の上から小さい名倉編が這い出す。いい！す

ごくいい！小人化十丸呑み！股間直撃！唾液でべたべたになってるのもぼく的に上

出来！……いや。だから。そうじゃなくて。



なにかしらの手段で小人化し、三三三三が口に入れることで護つたらしい。ま。賢明な判断。韻遣いは汎用性は高いが、何度か韻を踏んで自分で文脈をつくらなければならない。そのためスピードは劣る。じっさい《蛇ナ王ガ炎ラ殺サ黒ラ龍マン波ダ》に対応できなかった。残すなら前フリの要らないアナグラム遣いだ。

小人化を解除して元のサイズに戻る名倉編。その。なんだ。服は一緒に小さくなって、一緒に大きくなるんだな。そこは残念——じゃなくて。

えーと。いま何文字だ？ 386文字。しゃーんなろー。半か超。

そろそろ切り替えるかな。

「《破ハ魔マ環カ》」周囲を防衛し、「《空カ色ラ》」自分の色を消す。おれから出ることばも含めて透明になる。これで391文字。サンキューイッチ。ファツキュービッチ。

名倉編がおれを見失ってる間にその場を離れる。なにかしら対策を打っていずれおれを見つけるだろう。もって5分。その間に完成させる。

755

真言マントラの次はノリノリの祝詞。もちろんとびとびの語尾を——いや語尾というかこれ。なんやこれ。どうでもええ。やってまえ。

「この世の物事の混沌モンジュよ。古今の文書モンショよ。頓悟の本尊ボンソンよ。黄龍ワウロンよ。世の男どもの心の炎と巨根をものごころもおぼろの男の子ともども夜ごと灯そ。この子こそホンモンの女陰ポポ。個々の音とフォノンをもその根拠と混沌音頭を踊つとんのもお供のモーショボー、こそ泥のドロンジョ。キョン！ 音頭をとんのよ！ ほほ。大事よの。ちよつとどこの殿よ！ そんじよどこそこの喪女どの処女どののお小言もそこそこと汚そ。オートモードのロボットのノーモーションのフォロー。ほとんどジョジョ。ボボボーボ・ボーボボ、オモロー！ 香港もロンドンもよその都よ。こここそほんとの墓所ぼしょ。著書の本論こそ腹ぼんぼんの臍ぼぞ。このほどトトロとオコジョを五度ほどロード」

っし。完成した。

真言と祝詞。合せて666文字。□□□。無事笑納。

ここにさらに特大の触媒が到来すれば……

あいつらだ。

しかし待っても来ないな。名倉編。てっきり追ってくると思ってたが。もどつてみるか。

音を殺して校舎を駆け抜ける。渡り廊下を抜け、グラウンドのほうへ。校舎の影からグラウンドを伺うと……いた。

青く光ってる。おれが《倫理化》エチカ解錠のために敷いた陣の一部を流用、その中心に三三三三の炭。なるほどね。まだ息があつたのね。

ならば好都合。邪魔はしないでおくとしよう。

しばらく見守っていると陣がひとときわ輝き、放散する光の粒子を黒焦げた三三三三が吸い込む。光に包まれた三三三三が、ゆっくりと、立ちあがる。

よし。

つぶやく。

「《消灯》」シヨウデン

途端に三三三三をつつんでいた光が消え、同時にふたりの間におれが瞬間移動する。

なにが起こったかもわからぬままなにか言おうとする名倉編に「《順不動》」ジュンブドウ

ついで韻を踏みはじめた三三三三に「《韻殺》」インブレンテイションを贈る。

一方通行のアナグラム殺しと脳内ぐるぐるところろ韻殺し。

それぞれに致命的なメタスキル。

さらに「《透明拘束》」クリアバインダーで拘束。「《猿愚通話》」モンキートークで猿轡をはめて黙らす。むろん。口を止めても内語もあれば文字もある。言葉遣いの言葉遊びを止めるなら殺すか、眠らすしかない。けど。いまは用がある。

はじまりの言葉と世界のおわり。

名倉編のまえに立つ。「まずは君だ」顔を完全に覆ってる髪をかき分ける。

かっつっ

わいっつっつっ!!!

赤い瞳。浮かぶ悲しみ。まなざし妖し、光を放ち、儂い肌に、足ははだし。歳は二十歳はたちばかり。そこらのアイドルあたりじゃ逆立ちしても敵わない。鼻血でぞ。胸の高鳴りやばい。破壊的。かなりかわいっ!

……ま。襟撫なら僅差で勝つかな。

とにかく。とりかかろう。名倉編のうしろにまず。まわる。縛る《透明拘束》<sup>クリアバインダー</sup>に「針」を刺す、かがんで、針を啜え、改変する。

トリーナクリップ  
「《盗名拘束》」

針を唇で押し込むとすつと吸い込まれ、かわりに変質した《盗名拘束》からことばがふわりと浮かぶ。

名倉編

宙に浮かぶ「名倉編」の「名倉」の部分を取載する。これでこいつは今日から「編」。ただの編。そしてもらった「名倉」を三三三三からコピーした韻遣いでもって改変。

名倉

←  
アルファ  
A

はじまりの言葉——「<sup>アルファ</sup>A」を襟撫の卵子の入ったケースに導き、入れる。

「<sup>オメガ</sup>Ω」三三三三のまえに立つ。「君は、どうしようかと思った。本来なら「<sup>アルファ</sup>A」であり「<sup>オメガ</sup>Ω」である」が理想だった。はじまりの言葉と世界のおわり。しかし君の名はどのようにも遣えない。どないしょ。と思った。が——」

編と同様にうしろに立ち、《透明拘束》<sup>クリアバインダー</sup>に針を刺し、啜えて、《盗名拘束》<sup>トリーナクリップ</sup>に改変する。そして浮かんだ名を、今度は編から貰ったアナグラム遣いでもってさらに改変。

みどりさんぞう  
三三三三三

←

Mitori Sanzo

←

Saionzi Mort

←

西園寺 死  
Mort

まさに。世界のおわり。

「ありがとう」盗んだ名を卵子に吸収させながら言う。「完璧だったよ。君の名は。」

名を奪われた　　は目を睨り、じっとおれを見据えている。

「なにか言いたそうだな」

もう韻を踏まれる心配もない。《猿愚通話》モンキートークを解除する。

「おまえ、死んだで」

「は？」

さすがに思いがけないことばだった。この期に及んで？　が。一笑に付したりはしない。いま虚勢を張る意味はない。とすれば――。

ふりかえる。名倉編。暴れてる。じたばたと。それだけならただ《盗名拘束》トナケツリンに抵抗してるだけ。しかし。異様。とくに、白目を剥き、口の端から泡を吹き、握り過ぎた拳から血の飛沫が飛ぶ始末。この症状。

ふりかえって　　を見る。「おまえ、式か」

「それだけやったらよかってんけど」と、　　——編の式神は笑う。「こいつ「零点」やで」

——零点。

さっと、血の気が引く。こいつが。《第二の災厄》——

Null Pointer Exception  
《 零 点 神 童 》

なんて。もんを。「そうか」送り込んでんねん。「だからお前ら、ふたりだったのか」

「そや。見捨てられたんや。おまえも。俺らも。この街も」

「まずおまえに名を——」

「いらんで」せせら笑う。こいつ。死ぬ気か。この街もろとも。「死ねや」

おれはこいつの名を盗んだ。普通は問題はない。すこし不便になるだけ。しかしこいつは式だった。式の名が失われると、術者——つまりこの場合、編——の式をコントロールする術式が参照先を失い、例外を吐き出す。NullPointerException。それだけなら、やはり問題はない。例外は術者を襲い、処理できなければ苦しみもだえて死ぬだけ。だが最悪なことに、編は《第二の災厄》《例外の零点》つまりNullPointerExceptionの申し子だっ

た。

不幸中の幸いは、編の名を完全には奪っていないこと。それをやったらほんとうに終わる。名を奪ったが最後、編は存在の虚に落ち込み、認識すらできなくなる。そうなったら対処もくそもない。あちらからの攻撃も認識できず、敵意の対象にさえできない。まずは言葉遣いとして――

「ほら、よう見いや」地面を転げまわる編を可笑しそうに眺めながら、  
が笑う。

「おまえの先輩やで？」

ちがう

そうじゃない

《言葉遣い》じゃない。

おれは。

《倫理化》じゃとどこかへんどこまでどこまでもことばで遊ぶ。

《言葉遊び人》

「そっか。そうだよな」笑える。「先輩。なんだよな」

《第二の災厄》それは歴史上初めて《倫理化》を解除し、その結果起きた災厄。方法は、言葉遣いならだれでも知ってる――もちろんおれは別の手段を遣ったが――シンプルなこと。

ことばを失うこと。名を失うこと。

足元の編を見る。じたばたと苦しそうに暴れてる。そのかたわらに浮遊する彼女の名「編」に手をかけ。

盗んで壊す。

「おまえなにやっとなねん！ アホか！」

「たしかに先輩だよ」

「は？」

おれがなるんだからな。

《第三の災厄》に。

「すべてを丸く収めたければ、俺に《第二の災厄》について聞け」

「はあ？」

足元を見る。

だれか。いた気がする。ここに。さっきまで。じたばたと。ん？

なにが？

えーと。

おれは……。

ま。

いつか。

《倫理化》<sup>エチカ</sup>解除したおれを単独で捕えに来たこいつ——名を奪うとやっぱ不便だな——こいつを捕えて、真言と祝詞も完成させた。

あとは待つだけ。

さて。

824

「なあ」と　　がこちらを見上げる。

「なに？」

「《第二の災厄》のこと教えろや」

「なんで」

「なんでって、おまえが聞けゆうたんやろが」

「そうだっけ？　なんで？」

「知るか！」

んー。ま。いつか。

「《第二の災厄》は——知ってると思うけど——かつて凄腕の言葉遣いで、ハッカーだった。彼女にかかればどんなセキュリティも紙の如し。当時9歳だった彼女はまさしく神童。どうしてどんな対策を講じてもそつと戸を押すみてえに突破できるのか。こすい手？ 方法の欠片すら想像の彼方。生涯、彼女からはとうとう口外しなかった」

「ほんほん」知ってるのかなんなのか。よくわからない返事をしながら頷く。そのとき。左わき腹に大きく穴が空き、血が噴き出し臓が垂れる。式にも血とか内臓ってあるんだな。

「痛くないの？」

「なにが？」

「それ」脇腹を指差す。

「うおっ！　なんやこれ！　がつつりいてもうとるやんけ！　痛っ！　おんどりやなにしくさつてくれとんじゃボケエ！！！」

「いや。おれじゃないし」

「ほかにだれがおんねん！」

「いや。しらんけど……」

「ほんなら先言えや！」

「先？」

「さっきの話の先！」

「ああ……」それでいいのか。「……彼女はことばを失っていた。それは、かなり異常なことだ。人間は、この世のすべてはことばでできてる。だからことばを失うということは、そのまま自分自身が消えることを意味する。どのようなセキュリティも、空虚な欠如そのものを警戒対象にすることはできない。限りなく無敵だし正解に近い。だが。もちろん本来不可能だ。そんなことは。つねにすべることばで構成される自己を解体するにはそれなりに技術が必要だが、ことばを失えば失うほど技術も、支える思考回路も、意識さえも一気に灰となって解消される。意識とは内語だから。だから彼女は最後には迷子——」

「おい」

「ん？」

「おまえも、痛ないんか」

「ん？」反射的に自分の腹を見る。どうもなっていない。「なにが？」

「腕や。腕」

左腕を見る。右腕を見る。欠けてる。肘から先、肘に近い部分だけ削れてる。肉がごっそり。狼か虎にでも噛みちぎられたかのように。えぐれてる。血で濡れてる。皮がめくれている。「うぐあっ……」痛い。非常に。痛い。「痛いよ。これ」痛い痛い。

「そらそーやる」

「痛い。マジで」

「えーから先話せや」

「……彼女はまずガワをつくった。他者と会話し、挨拶し、たいらげ、ときには怠惰に惰眠、オナニーをする、ただの、ガワを。周囲からの印象はふつうの言葉遣い。ほんのわずかに異なるガワに彼女はスクリプトを仕込んだ。通常の生活をするスクリプトと、スケ

ジュールが来たらずぐにふと「内側」のことは消去していくスクリプト」

目の前にいてるやつの頬がしぜん空間に噛みちぎられ、消える。噛みしめる奥歯が見える。面倒なので放っておく。

「そうやって、彼女は消えた。脳に仕掛けられた《倫理化》<sup>エチカ</sup>は制御する対象を失った。《倫理化》<sup>エチカ</sup>だけじゃない。あらゆるルールは《彼女》を対象にできなくなり、《彼女》にとって意味を為さなくなった。こうしてすべてのルールの埒外となった《彼女》は、任意の命令を実行でき、しかもそこにはなんの目的も、意志もない。そういう《災厄》ができあがった」

ふと下を向くとふとももから血が流れていた。というか。やはり肉が削がれていた。

「言葉遣いたちは、かなりの犠牲を払ったが、最終的にこの最悪の《災厄》を滅ぼした、とまでいかなかったが対策を施した。そのときは世界中の才覚を結集し《災厄》を再確認する解釈を配達し、名をつけ、名に隠し、名で縛ることで至るところでルールを復活させ、二つ名で、彼女をふつうの言葉遣いにもどした。そのあとのことは知らない。どんな名だったかも知らない。悪用を防ぐため、言葉遣いに対してさえ、《災厄》につけられた名は伏せられた。おまえ、しってる？」

「しらんな」右腕の肉が食べ終わった手羽先みたいに綺麗に骨だけになって、骨がバリバリ砕けながら嘆息する目の前の男。「で。結局なんやってん」

「わからない」

わからないけど。そろそろだ。

パキンッ！

音がする。ふところから出す。

ちいさな金属のケース。ゆらゆらと白い冷気を呈す。

なかには卵子が封入され、凍結保存を術が命ず。

ケースには亀裂が走ってる。はみ出る、尻とも頬とも足の指ともつかないただの肉。泡のようにぶっくり。はみ出してる。

パキンッ！

ケースが手のうえでまっふたつ。割れる。立方体の卵から孵ったひよこのような、血の膜につつまれた、肉のボールがもぞもぞと動く。そうこうする間にもう一方の手の指がだんだん短くなる。

肉のボールはぶくぶくと泡立つように膨れる。植物のように縦に伸びる。急激に重くな



り、地面にそつと置く。バランスを崩して倒れそうになったところ、脚が生え、支える。ばびゅん☆ ばにゅん☆ 四方に腕と脚がぶち生える。4本ずつ。計8本。

4本の足の4つの股には、女性器、尻、女性器、尻、の順番で交互に無毛の女性器が咲く。おめでとう。元気な女の子ですよ。

4本の腕のあいだの4つの谷間にも、胸のある胸と、胸のない胸がある。ようするに、ふたりの女の子が背中合わせにくつついてるように、片方の対角線上に計4つの乳房と2つの女性器が集中してる。

肉樹のてっぺん、ふたつのつぼみが大きく膨れ上がり、ばきやあ、表面が裂ける。裂け目からちいさな白い果実がいくつも実り、集り、目となり、歯となる。目はぐによーんと縦に伸びて果実の表面がさらに裂ける。黒目になる。

おぎやあ。おぎやあ。泣きわめくふたつの声。その直下にあるふたつの女性器の上方、皮膚のなかから小人がおもいきりパンチを繰り出したように突出し、そのまま痛そうなほど怒張しつつ延長、男性器となって屹立する。

——うつくしい

おもわず声が漏れる。両性具有の神像のようだった。

頭部からは、発芽するカイワレ大根の早送り映像のように、みるみる黒髪が繁茂する。と同時に泣き声から幼さが消え、しくしくと静かな泣き声に切り替わる。

「言葉」

声をかけると片方の頭部がふり返る。白い肌にうるんだ漆黒の瞳。不思議そうにこちらを見てその子を「《事後》<sup>コトノア</sup>」と名付ける。嬉しそうに笑う。

「世界」

もう片方の子がふり返る。「あ」「あ」突き上げるような声を繰り返す。この子は「《性買》<sup>セカイ</sup>」と名付ける。くすぐったがるように身体をくねらす。

そろそろ羞恥の心が芽生えるだろう。服を用意してあげ——

ぶぢゅううう

コトノアの大きな左乳房が血を噴いてえぐれる。ぼたぼた、と黄色い脂肪がおちる。

悲鳴を上げる間もなく乳房は無くなるまで空間に剥ぎとられ、ついで右乳房、そして男性器がもげる。白目を剥いたコトノアはセカイから外れる。肩のところ、脚のつけ根のところから腐り落ちるように脱落する。セカイには4本の腕と4本の脚が残され、地面に落ちたコトノアには腕も脚もない。芋虫のように地面に這いつくばって気絶している。

しかし変化もあった。空間にえぐりとられたコトノアの両乳房と男性器は、これまでとちがいが、ちぎれたまま空間に残っていた。行き場を失くし、戸惑うように宙をふらふら漂い、自らを振り払うように縦横に暴れる。それら肉塊はしだいに空間に消化され、空間にうつすらと血色と肌色のまだらが広がる。その輪郭は人の形になる。うつむいて、新鮮な血肉の色が沈殿する両手を見つめる。

「言葉」を食べたな、《第二の災厄》

零点に言葉が充填される。

人の形のまだらが顔を上げる。

名指せるようになり呆然とする《第二の災厄》を、セカイが四臂四脚で羽交い締めにする。ふりほどこうとする抵抗も虚しく、全身で食むように吸収され、消える。げっふ。

「おい」

「おっと失礼」

にこっと笑ったセカイは地面に転がるコトノアを拾いあげ、接吻する。流動食のようなドロドロのなにかを流し込み、すこし待つと、コトノアが目を開く。「ありがとう」

「おうよっ！ どういたしましてえ！」

ふたりは元気に笑いあう。

微笑ましい光景。

そんなふたりの様子を、  
は、存在しない自分の名を呼ぶようにぼかんと口をあけて眺めていた。「なんや、これ」

「おれの娘たち」答える。

「せ」口をわなわな震わせながら言う。式も口をわなわな震わせることつてあるんだ。

「生命創造、やと。……外法中の外法やぞ」

「陰陽道はもとより外法。それに」名を奪われ、エネルギーを供給する術者も死んだいま、もうすこしで消えてなくなる式のまえに立つ。「生命じゃない。神、いや、女神だよ。

コトノアとセカイは、《外の自我》だ

それを聞いた　　は、へんな顔をして、それから最期になにか遺したかったのだろう。采配高校の制服を2着生成し、コトノアとセカイに捧げた。ふたりは、まごついた。おれは、気をきかせて教えてやった。

「コトノア、セカイ、きみたち、まっばだかじゃないか。早くその制服を着るがいい。この可愛い式は、ふたりの裸体を、おれに見られるのが、たまらなく口惜しいのだ」

ふたりは、ひどく赤面した。

夜が明け、昼になってようやく、言災警報が発令された。

「あれ、真言くん」校内放送に従ってぞろぞろとグラウンドへ出る生徒たちの群れから2年4組の教室のなかのおれに声がかかる。常夏先輩の声だ。「避難しないの？」

「ぼくは言葉遣いなんで」

「そっか……大変だね。気をつけてね」

「はい」

廊下をつまらなさそうな顔であるく生徒たち。なにが起こっているのか知らされてない。言災警報どころか《第三の災厄》がすでに発生していることも。その張本人がおれであることも。知らない。むしろ教室のなかに単独でぼつねんと残存するおれを見て「ん？ ああ。あのひと言葉遣いだっけ」と発想し、納得する。言災警報を発令させたなにかよくわかんない災害を、おれが処せると、下手すれば高潔な言葉遣いだと、そう思い込んでる。

ほとんどすべて、透徹に想定する通り。《倫理化》<sup>エテカ</sup>を解除しても、所詮政府は本件を公表できない。「無用な混乱」を生むから。極秘裏に処理する。さすがに《第二の災厄》をぶつけてくるとは思わなかったけど。おれがすぐに破壊的行動に出ないと見るや、一度見捨てたこの街の住人を《結界》の外に逃がす。この街は半永久的に封鎖される。おれが出ない限り。

その日のうちに、この街からおれ以外の人間はいなくなった。

屋上に立つ。山の上に立つこの高校からは夕陽差すこの街の全体が一望できた。

死んだように静かだった。遠くから見るだけでは街に人がいるかどうかなんてわからないと思ってた。わかった。一目瞭然だった。どこが、とか、確かな論理的説明はない。ただ。そこに人々がないことは明らかだった。

人がいない空の街に水を一滴おとすように、つぶやいた。

「生きるぞ。一生分」

「転校生を紹介します」  
教壇に立って、整然と並ぶ机と椅子に語りかける。  
右手と左手、おれの娘たちがおれの与えた名を黒板に書きなぐる。  
「コトノアと申します。よろしくお願ひします」  
「セカイです。よろしくう！」  
ふたりとも席につく。  
瞳を輝かせながらこちらを見る。  
「では。授業をはじめます」

859

「言葉遊びには大きく分けて2つの種類がある」  
黒板にチョークで「言葉遊び」と書きながら言う。  
「時間に関わる言葉遊びと、空間に関わる言葉遊びだ」  
ふたりの生徒はしずかに聞き入ってる。

「たとえば押韻は時間に関わる。「関わる」と言ったあと「抗う」といえば過去の音韻への参照がうまれる。いっぽうでたとえば「いいながら瞬く間にまだ書く。黒板に「出産」。ルビを振る。「《出産》」。これはある瞬間のひとつの言葉の読みを「しゅっさん」と「デッサン」に複数化している。したがって共時的な、または空間的な言葉遊びとしてはたらく」

↑  
↓  
時間的 (例…関わる・抗う・はばたく・正和)

↑  
↓  
空間的 (例…《出産》)

「といっても多くの場合、これらの言葉遊びは相補的だ。たとえば」黒板にチョークを走らせる。

《美人局》

「「つつもたせ」と「メスシリンダー」に読みを複数化させている。これだけでは言葉遊びは単に空間的だ。だが」さらに書き加える。

無垢と舐め悦に入ったらメスシリンダー《美人局》

「さらに押韻を加える。このとき「無垢と舐め悦に入ったらメスシリンダー」とよめば「悦に入ったら」と「メスシリンダー」で韻を踏んでることがわかる。しかしそれだけでは完全ではない。つぎに「無垢と舐め悦に入ったらつつもたせ」とよみなおす必要がある。すると「無垢と舐め」と「つつもたせ」が韻を踏んでいる。重要なのは視線が行き来する、この運動だ。通常、文は一方向に線状に進む。しかしこの文はメスシリンダー《美人局》の読みの複数化と押韻を組み合わせることで、「無垢と舐め悦に入ったらメスシリンダー」とよんでから再度「無垢と舐め」に戻り、「無垢と舐め悦に入ったらつつもたせ」とよみなおす、そんな経路を読者に辿らせる。つまり、読者を組み込んだひとつの機械になる。と同時に、押韻による時間的な効果によって「美人局」の読みを事後的に改変している。言葉遊びの主要な機能のひとつ、過去改変・現在改変・未来改変はここから生まれる」わー。とセカイが目を大きく見開いて4つの手でちいさく拍手する。それを見てコトノアは手がないので拍手できず、「ばちばちばち」と口で言う。

かわいい……。うちの娘。超かわいい……。

「さらに加えてみよう」

無垢と舐め背筋キスから服をあげ悦に入ったらメスシリンダー《美人局》

「わかると思う。5・7・5・7・7。短歌になってる。しかしここでも読みの複数性が邪魔をし、攪乱する。メスシリンダー《美人局》を「メスシリンダー」とよめば、たしかに5・7・5・7・7だ。だが「つつもたせ」とよんだ場合、5音だから5・7・5・7・5。短歌にならない。いっぽうその場合「服をあげ悦に入ったらメスシリンダー《美人局》」の部分が5・7・5。つまり川柳になる。どの読みを採用するかで短歌になるか、川柳になるかがわかり、対象となる範囲も異なる。こうした効果を応用すれば、現実を分岐・複数化させることも

できる。つまり「メスシリンダー」とよんだ者には世界線Aを駆動させ、「つつもたせ」とよんだ者には世界線Bを過ごさせる。ふたつの影。もつとも、それはかなりの高等テクニク。そうそうできるものではない」

世界線の分岐にかなりの興味を示したふたりは、簡単にはできないとわかって露骨に残念そうな顔をした。

かわいい。

867

ゾンビゲーの世界に放り出たみたいだった。

人のいない街は日が経つにつれ荒廃する。徐々に。ゆっくりと。

おれと、コトノアと、セカイ。3人で、街を探検しながら過ごした。

セカイは4本の足で歩き、手足のないコトノアはふわふわと浮いて移動する。大気中に漂う様々な粒子と言葉で相互作用することで浮遊する術を、コトノアには手ほどきした。

窓を割り、民家に入り、避難時に放置された食糧を食べ、服を着替え、風呂に入り、ベッドで眠る。コンビニも便利だった。ことばで稼働する《外の自我》<sup>ガイノイド</sup>であるコトノアとセカイは食べる必要はなかったが、娯楽として食べることを好んだ。ときたま「あーもー。太っちゃうー」ときゃあきゃあ言いながらスイーツを頬張る、という、なんだから、いやとりをふたりして楽しんでる。

電気も水道も止められる様子はなかった。《第三の災厄》がこの街から出ようという気になると困る、という配慮だろう。ありがたく頂戴する。ま。べつになくても言葉遊びでなんとかなるけど。

ネットもつながる。だからなんだかんだ、そこまで大袈裟な変化でもなかった。ただ、人がいなくなつたことで自由度はかなり上がった。

生まれた頃から住んでいるこの街はよく見知っている。けど他人の家のなかにまでは入ったことはなかった。他人の家は、いつも奇妙な感じがする。なんというか、内臓みただ。そういう異質な空間に自由に出入りし、どんなものか知ってから見ると、よく知ってるはずのこの街もかなり違って見えた。内臓。内臓を見たから。変わったんだと思う。

おれとコトノアとセカイは、この街の内臓のなかで、あるいは内臓と内臓のあいだで、よくセックスした。見る者はどこにも、だれもない。どこでも自由にセックスできた。というより実際のところ、他人の家の寝室と、キッチンと、居間と、コンビニと、ファミレスと、教室と、道端と、駅のホームと、線路と、神社と、一体どこでセックスするのが恥ずかしくて、どこなら恥ずかしくないのか、よくわからなかった。どこでやってもそれなりに燃えた。いや。かなり燃えた。

そういえば。いちばん最初。初めての授業が終わった直後にふたりが制服を脱ぎだし、おいおい、と思ったあのとき。問題がひとつ持ち上がった。

童貞問題だ。

あのときおれは童貞だった。すこし前まで言葉遣いで、《倫理化》<sup>エチカ</sup>に性欲を抑制されてたから、当然だ。そしてその童貞を、どちらが奪うかでふたりは喧嘩した。

最終的におれが《文信不通》<sup>ダブルスタンダード</sup>で分身することで決着がついた。ただ、分身のどちらがオリジナルとか、コピーとかいうことはないということを説明するのに授業より長い時間を要した。やれやれ。である。

他人の家の窓をぶち割ったり押し入ったりしながら街を探検し、ときおりセックスし、そして時間を見つけては授業も継続した。言葉遊びについての授業を。

「《如律・令・即席》<sup>インスタント・インスタンス</sup>教室空間を宣言する。『では。授業をはじめます』  
チャイム鳴りぬ。」

877

「言葉遊びにおいて重要なのは、まず文脈をつくることだ」

黒板にふたつ、名前を書く。名倉編。三三三三三。

「おまえたちを生んだあの日に殺したふたり。名倉編と三三三三三。あいつらはそれぞれアナグラム遣いと韻遣いだった。この「くく遣い」というのは多くの場合、どのような文脈形成を得意とするのか、を意味する」

コトノアがふむふむ、頷きながら机の上のシャーペンにことばで干渉して筆記する。

「たとえば韻遣いは発動したい言葉遊びのまえに、同じ音韻の言葉を配置することで言



言葉遊びを有効化し、あるいは強化する。まえに言ったように押韻は時間的な言葉遊びだから準備に時間を要してしまうが、そのぶん汎用性は高い。韻を踏めば踏むほど、言葉遊びの内容に関わらず単純に効果を「強化」できるからな」

べつ言葉遊びとの連携も比較的楽だ。

「アナグラム遣いは、本来なら時間型だ。ことばの時間的な順序を入れ替えるわけだからな。ただ。名倉編はすこし特殊なことをしていた。会話の流れに沿ったことばをシャッフルし、漢字に変換、さらにルビに元の文を入れ込むことで読みの複数性——つまり空間的な効果を創り出していた。ここではアナグラムとともに会話の流れ、つまり意味的な文脈が利用されていた。三三三三もやっていたが、常套手段ではある。韻遣い、アナグラム遣いといっても、韻やアナグラムしか使わないわけではない。単一の文脈では強度が弱い。強力な言葉遊びを発動する場合、大抵複数の技術の併用が必要になる。ただ、自分の得意分野を認識しておくことは重要だ」

「しつもん」2本の右手があがる。

「はい。セカイ」

「おとう——先生は？ 何遣い？」

「おれは……強いて言うなら《文脈遣い》かな。コピー系と呼ばれることが多いが、他の言葉遊びのスタイルのつかって、真似する、というのが基本方針だ。つまり、たとえば相手が韻遣いなら、「相手が韻を遣ってる」ということそのものを文脈として利用する。互いに韻を踏めば踏むほど、押韻が他の文脈からみて相対的に強力な文脈としてその場に登録される。相手も強化するから諸刃の剣だが、難易度が高いぶん強力だ」

「《記憶漏出》<sup>メモリーリーク</sup>」で先日の戦闘の記憶をふたりに送り込む。

「典型的な例がこれだ」

「奴は名倉編だ。それがわかるか！ わかったら死んでみなカスが！ 維新的なアウラ。

纏う《要 円》<sup>神聖なチャクラ</sup>」

「どうぞ勝手に己が炎にまかれて死ね。《曉 焰》<sup>BITE THE DUST Burning Dawn</sup>」

「前の台詞が三三三三。後がおれだ。実際にはあいだに別のやりとりが挟まっていたが省略した。この応酬は互いに様々な文脈を入れ込みまくってる。今回の話に関係ある部分に絞ると、相手の言葉遊びのなかから「《要 円》<sup>神聖なチャクラ</sup>」《かなめまどか》という文脈を抽出

し、「**焼** Burning Dawn」**焰**」あけみほむら」に繋げてる。前半の「勝手に己が」の韻で強化すると同時に、べつの読み「要円ようえん」に対し「**焼** Burning Dawn」でも韻を踏む。こ  
うやって相手の言葉遊びに乗っかることで、相手の発動した言葉遊びの効果にも干渉でき  
る。この場面では**要** 神聖なチャクラ **円**」で相手が纏ったオーラをさらに激化、炎上させ、Burning Dawn **全** **焼**  
させた。相手のスタイルを真似ることで相手も強化してしまうと言ったが、強化すること  
で自爆させる、という風に悪用することもできる」

《記憶漏出》を解除する。

「これがおれの得意なやりかた。他者の言葉遊びをコピーし改変する本歌取りの  
言葉遊び。《スキャル本歌鳥居》。《鳥居みゆきソング・ブック鳥居》。こういう風に自分のスタイルに名前をつけるのもよくある  
手だ。手の内がバレるリスクがあるものの、言葉遊びを強化できる」

「質問です」声が上がる。

「はい。コトノア」

「ほかにはどのような文脈がありますか？」

「意味の文脈、韻、アナグラム、あと短歌や俳句などの音数の文脈のほかには、しりと  
りのような前の言葉の一部分を取り出す文脈、上から読んでも下から読んでも同じになる  
回文や、縦読み、横読み、斜め読み、翻訳、引用、パロディ、方言、あと文字の音でなく  
形に着目する場合もある、漢字の部首を揃えたり、アとマ、ソとンなど形の似た文字を入  
れ替えたり、レアなところだとギャル文字遣いも見たことある。あれは真似できそうにな  
かったな。特定の文字を使わないリポグラムなんかもある。リポグラムはおまえたちを生  
む際にも、あ段と「ん」以外使わない真言、お段と「ん」以外使わない祝詞として使用し  
た」

あ、そうそう。

「文脈についてももうひとつ大切な話がある。あのときおれは《ナーガラー蛇王炎殺黒龍波》  
という言葉遊びを遣った。これは、通常の文脈なら結構ひどい部類に入る言葉遊びだ。い  
ろいろ粗い。実際に大した効果は期待できない。しかし「あ段と「ん」以外使わない」と  
いう文脈のなかにあつては、その長さからかなりの効果をもつ。似た例として《バーバ・ヤーガ山姥》  
は、バーバ・ヤーガが山姥と訳されることがある、という程度で文字と読みの繋がりが非  
常に薄い。言葉遊びとして成立するかどうかも怪しい。しかしともに「あ段と「ん」以外  
使わない」ことばだからこそあの場面では効果を発揮した。このように、文脈によって成  
立する言葉遊びも変わってくる。文脈は一見して「制限」のように見えがちだが、むしろ

言葉を輝かせる背景だと考えた方がいい。通常の、意味的な文脈と異なる文脈を導入することで、意味の——すなわち物理の——法則のもとでは生まれなかった言葉が生まれる。それが言葉遊びだ」

チャイムが鳴る。娘たちはすぐに制服を脱ぎます。

いやいやいや。いまちよつといいこと言ったよね？ おれ。もうちよつとこう。ないの。余韻とか。わ。エロ。どんどん淫らになる。いただきまーす。

905

実技もやる。

いや。実技ってそんな。へんな意味じゃないですからね。この変態。

言葉遊びの実技です。

緑の草生い茂る公園。以前なら駆け回る子供とその親、ベビーカー、ベンチに座る老夫婦、フリスビーを追う犬なんかが見られたであろう、けっこう大きい采配北公園。いまはいやに静かだけど、あたたかい日差しは変わらない。

その中央。コトノアとセカイが対峙する。距離はおよそ3メートル。中央には一枚の紙切れ。人型に切り抜いた形代。

「はじめ！」

まずセカイの唇が口火を切る。

「どうとう来たなこの時が。もう終わりだなコトノアとも。掃討しなさい。《ロノア・ソロ回乃函》」  
形代が浮き上がり、ぐじゃつと潰れたかと思うと、ぐばあつと広がって緑髪の剣士に変身する。

「そっちがその気ゾロに、ならわたしには《たしぎ下着》」剣士がふたたび形代に戻り、こんどは下着姿の女剣士に変化する。

「半身となりし半神人。おなじみの《あじむ安心院》」

「《キラークイーン気楽院》」

「《バイツァ・ダスト灰は塵に》」

「そこまで！」危ない。あんまり文脈を充満させすぎると結界を破壊してこの街を出る

ための儀式かなにかをしてるんだと思われる。このまえそれで怒られたから。おれが。

「えー。まだわたし3回目やってないです」コトノアがぶーたれる。

「それも深慮して引き分けとしよう。両者に50ポイント」と嫉妬したりしないよう、ひらり、ふたりに50円玉を渡す。

「ふふ」しっかり見開いた目でセカイが50円玉を仔細に見つめてにやにや笑う。「もうすこしでお父さんの処女がわたしのものに……」

おもわずケツを隠す。「……あと何ポイントだっけ？」

「10ポイント。待ちきれない」

「10ポイント……」やべえ。マジか……心の準備しとかないと……。

「ねーねーお父さん」

「なに」

「まけてよ。10ポイント」

「は!?!」

「まけて。今日やりたい。待ちきれない」

「まかるか! 馬鹿者!」

「ねー。まけてよー」

「この世のどこに自分のケツの穴値下げする奴がいるんだよ!」

「ここに」こちらを差す指。やめい。

「しないよ?」

「ケチ」

「ケチで結構」

「ねー」

「は!?!」

「まけてよまけてよまけてよ!」

「まからんまからんまからん!」

LIKE THE DUST

「まけて死ね!」

「死んだらダメでしょ!?!」

「や……まあ」恥ずかしそうにもじもじと俯くセカイ。「屍姦もいかなって……最近」

完全。イカれてやがる。流石おれの娘。

肩を2度叩かれる感触。

振り向くとコトノアが満面の笑みで100円玉9枚と50円玉2枚を浮かせてこちらに差し出す。

「え？ だって、昨日も……」

「貯めてたの」と嬉しそうに笑う。

「ちよ、つとまって。流石に昨日の今日で——」

「はやくしろ。《強行採血》」  
フオースサンフリンダ

コトノアの犬歯がよきによき伸びたかと思うとガッツウ！首筋を噛まれる。

「あぐうあ」

全身に走る快感を感じながら思う。

ほんとうにもう、どうしようもない娘たちだな。

986

「以前、言葉遊びには空間的スペースライクなものがあると聞いた」  
着席し、ノートを広げたコトノアとセカイに語りかける。

「これらは言語論的転回以前の物理学、とりわけ特殊相対論における因果律を説明するときにキーとなる言葉だ。空間を水平の面、時間を垂直な1軸でとって3次元空間のように時空を図示するとき、光速は原点を頂点とした円錐を描く。光円錐と呼ばれる。原点に観測者を置いたとき、ライトコーンの内側は光速以下で到達できる範囲、すなわち因果的に繋がれる範囲だ。これを時間的と呼ぶ。反対にライトコーンの外側は空間的。因果的に繋がれない範囲だ。夜空を見上げるとき見えるのは、何年も前の星の光だ、というようなことを言うことがある。それと同じことが日常的なものと近い範囲でも起こっている。いまおれの目に見えるコトノアやセカイは、ほんのすこしだけ過去のコトノアとセカイだ。空間的というのは、簡単に言えば同時的であるということだ。同一時のものを見ることは決してできない。このことから空間の他者が生まれる」

ふたりはすこしだけ寂しそうな顔をする。

「さて。言語論的転回直前の物理、超弦理論が必要になったのは、簡単に言えば物理の基本単位を点粒子で考えるとどうにもうまくいかなかったからだ。だから、空間的な広が

りをもった「ひも」を考えた。ここに言語論的転回を加えることで超言理論が生まれる。言語論的転回の物理的意味を真面目に説明すると時間が足りないからおおざっぱに説明すると、「物理の基本単位はひもではなくことば」ということだ。では「ひも」と「ことば」はなにが違うか？ 広がりをもつ方向が違う。「ひも」は空間的な広がりを考えることで点粒子の物理の困難を脱した。対して「ことば」は、可能性方向に広がりをもつ」

「えーっと……先生」

「はい。セカイ」

「よくわかりません」

「うん。ごめん。説明が悪かった。平行世界を考えてみよう。この世界と似ているがほんのすこしだけ、あるいはかなり異なる無数の世界。可能世界といってもいい。便宜的に「この宇宙」を2次元の平面と考える。そして同じく平面のほかの宇宙——つまり平行世界、可能世界——を重ねる。何千何万枚も重ねたところで厚みがでてくる。これが可能性方向の広がりだ」

「わかってきたかも」

「うん」笑って頷く。「ことばはこの可能性方向の広がりをもつ。一般には固有名について言われることだ。このおれは「真言」という名前をもつ。この「真言」を定義しようと思ったら「男性」「高校一年生」「言葉遊び人」……というように「真言」のもつ要素をひとつひとつ挙げていく必要がある。しかし、そうしたとしても「真言は女性だ」という文は作れてしまう。言い換えると「男性である真言は女性だ」ということになる。奇妙だ。たとえばおれが性転換して女性になったとしてもおれはおれだろう。したがって「真言」の定義から「男性」を抜かなければならない。とすると「高校一年生」も奇妙だ。幼稚園児のときもおれは「真言」だった。……という風に定義を抜いていくと、あとにはなにも残らない。男性でも女性でも何歳でも何者でもありうる「真言」という名前だけが残る。「真言」という名前は、おれが女性である世界や、蠅である世界といった様々な可能世界を貫通して存在する。これが「ことば」の性質だ。これは単に言葉の問題だと思われるかもしれない。しかし違う。物理的に平行世界を考えるとときにも同じ困難が付きまとう。たとえばある粒子が互いに異なる状態をもつ複数の平行世界を考えたととき、そもそもどうしてべつの平行世界にある「ある粒子」を「同じもの」と考えることができるのか？ 平行世界を考えなければこの困難は無くなるか。それも違う。ある粒子の時空上の軌跡を描くとき、そもそもどうして異なる時刻の「ある粒子」を「同じもの」とみなすことができる

のか？ 「真言」ということは高校生と幼稚園を——つまり時間方向に——貫通する性質をもっていた。同様の性質を素粒子がもっていることは自明だ。というよりそれが因果律の必要条件の一部を為す。さて」

さすがにひと息に話し過ぎた。自分も疲れたし、コトノアやセカイもついて来るのが難しくなってるかもしれない。ひと息おく。再開。

「特殊相対論的な因果律ではライトコーンの外側——つまり空間的な領域——は因果的な関係を結べないのだった。では可能性方向の空間はどうか。結論からいえば、可能性方向の空間的な領域は因果的に干渉する。ここには光速不変の法則が深く関わっている。つまり、因果律の基準になるライトコーンを規定する光速が不変であるため、「光速」の可能性方向の変化率は極端に小さい。対してほかの多くのことばは「光速」よりもよっぽど変化する。つまり可能性時空に限って言えば、あらゆる「ことば」は「光速」よりも速い。いわば可能性時空におけるあらゆる言葉はタキオンのような性質も持つということになる。それは光速を超えない世界における因果律とは逆に、空間的にしか因果的な関係を結べない。もつとも「光速」の可能性方向の速度がほぼ0、有限値は未だに観測されてないため、ライトコーンの直径はほぼ常に0、時間的な領域はほぼ無いといえる。つまり事實上、あらゆる領域と因果関係を結べることになる。これが言葉遊びの強力さの源泉だ。言葉遊びとは結局のところ、「決して現前したことのない、そして今後も決して現前することのない『過去』や『未来』——もつとも因果律のことばでいえば可能性方向のあらゆる領域は空間的<sup>スペースライク</sup>に『現在』なのだ<sup>スペースライク</sup>が——からの干渉だ」

キーン。コーン。カーン。コーン。  
チャイムが鳴る。

「ところでおれの——」

「えー！ ちよ、ちよつとまだやる気？」本気で驚くセカイ。

「まあまあ。あとちよつとだから」となだめて続ける。「おれの<sup>鳥居みゆきソング・ブック</sup>《本歌鳥居》のふたつの性質——コピーと改変——はおまへたちにも受け継がれている。セカイはとくにコピーが得意だな。「三三三三三」の名前を改変した「西園寺<sup>Saijonzji</sup> 死<sup>Mort</sup>」を受け継いでるからだろう。コトノアは自分から言葉遊びを出すのは不得意だが、他者の言葉遊びの改変は得意だ。

「名倉」を改変した「<sup>アルファ</sup>Α」を受け継いでるからだろう。何故「三三三三三」ならコピーが得意で、「名倉」なら改変が得意か。これもやはり空間的<sup>スペースライク</sup>と時間的<sup>タイムライク</sup>に関わる。三三三三三は韻遣いだった。時間的な言葉遊びである押韻は、すでに時間が異なっているため、「同じ」

音韻をサーチする。反対に空間的な言葉遊びを得意とした「名倉」の場合、同じ瞬間の一つの言葉の読みの「差異」に着目する。時間と空間、どちらかが「同じ」でどちらかが「異なる」っていないと言葉遊びは成立しない。どちらも「同じ」ことばは単にふつうのことばだし、どちらも「異なる」ことばは単に無関係なことばだからだ。逆にいえば、時間と空間の2軸があるからこそ言葉遊びは可能になる。コピーが得意なセカイと、改変が得意なコトノア。ふたりは相補的ということだ

「ようするに、仲良くしろということですか？」

せっかく迂遠に伝えようとしたことをそのまま言われてしまつて苦笑する。「正解だ」

「それなら心配いらないよ」とセカイ。「あたしたち、すごい仲いいもん。ねー！」

「……はぁ」溜息をつく。コトノア。

「え、え……」あたふたするセカイ。

「……うっそー」にやつと悪戯っぽく笑うコトノア。

「お、お、おいしいいいい！ ビビったじゃんかよお！ マジでえー！」

「あははは。大好きだよ。セカイ」

「うおおお。あたしもだよー！ コトノア！」

いちやつくふたりの娘を見て、心底、よかったと思う。

泣きそうだ。

幸せすぎて。

975

結局のところ

おれはなにも変わってなかった。

おれはなにもわかってなかった。

あのときから。

襟撫を失ったときから。

目の前にある、見える範囲の現実ばかり見て、そのじつ、なにも見えてなどいなかった。

ひとり。お気楽に。幸せだった。



「なんで……」

セカイがいまにも泣きそうな声でつぶやく。「ごめんなさい」

深夜。だれのものかもわからない家の——表札はたしか「伊藤」だった——居間、嘘くさいライトの下、ソファに腰掛ける。セカイはその傍らに立ってる。コトノアは寝室ですやすや寝息を立ててることだろう。

「妊娠……」最初、その言葉の意味がうまく理解できなかった。言葉でできたガイノイドは妊娠しない。そんな機能、おれは与えてない。言葉遣いだった頃、言葉遊び人であるいま、ずっとおれには関係のないことばだと思ってた。「……どう、やって」

「言葉遊び」顔を上げる。「《人神思想》<sup>ニンシンシソウ</sup>」とセカイが言うと服のなかでセカイのお腹がぼんやり光る。その言葉遊びで妊娠可能な身体を手に入れた。ということ。

可能だ。言葉遊びなら。

頭を抱える。「なんで、そんなことを……」

「特別に、なりたかった」セカイを見ると、こちらを見てる。「あなたの、特別に。ふたりのうちのひとりじゃなくて。あなたのひとりに。お父さ——真言の、ひとりになりたかった」

くちびるの内側を噛む。「コトノアの気持ちは、どうなる」ちがう。「セカイが1番で、コトノアは2番目。それが望みなのか」ちがう。「だいたい。矛盾してる。子を産んだら、敵が増えるだけだ。子供優先になるし、それに」そうじゃない。「コトノアだって子供を要求するだろうし。まったく筋が」そんなこと

「そんなことわかってるよ！」

涙を流し、目を真っ赤に腫らして、セカイはお腹をおさえていた。

「でも、欲しかった、欲しかったの！」

立ちあがる。セカイに向かう。「《人甲虫説》<sup>変身</sup>」吐いた言葉を手の平にのせる。それは青白く光りながらうねうねと手の平を這いまわる。

「わかるだろ。人工中絶。の言葉遊びだ。これを呑めば、胎児は蟲に変わり、ほどなくして息絶える。セカイとコトノアとおれ。またもとの3人に戻れる。これが最善だ」  
掴む手。いやいやと振る顔。悲痛な視線。懇願するような。

「辛いなら、記憶は消そう。お腹の中の子のことはおれだけが覚えておく。コトノアとふたりで愛されることに満足するよう思考を調整してもいい。だから——」

腰に手を回す。右手に乗った《人甲虫説》<sup>変身</sup>をセカイの口元に近付ける

「いや！ いや！ いやあああ！」

突き飛ばされる。セカイはお腹を押さえながらおれに対して身構える。

「殺させない。絶対に」

見間違いか、その顔に、はっきりと、憎悪、が、刻まれた、一瞬、そんな気がした。

どうして？

どうしてこうなる？

おれは

おれのことを好きになってくれた人を、もう、決して失望させないために、こうなった。

何故こうなるんだ？

セカイ。セカイ。いま。おまえを苦しめてるものはおまえの腹のなかにいる。

なぜ理解しない。できない。

いや。

「わかってる」おまえも。おれも。

呪い。

おまえはおれに、呪いをかけようとしている。理屈で、論理でわり切れないものがいまおまえを駆動し、やがておれをも駆動するようになる。おまえはその腹の中の「呪」を通して、おれを操ろうとしている。わかってる。

世界がぐるぐる回る。できることなら、その「呪」にとらわれたい。わかった。いま。とどいた。いっさいは呪いだ。呪だ。始原から最期まで。あらゆるものを駆動するそれは呪いだ。その呪いに、おれは呪われたい。でも、

セカイ。気付いてないはずはない。呪うのはおまえだけじゃない。存在しない可能性から呪いはやってくる。コトノアのお腹の中から。未来のおまえから。

セカイ。「おれの愛は充分じゃなかったか？」

「ちがう！」

おれはおまえを充分に愛せていないから、いましがた、こんなことをしてるのか？ おれとおまえの子を殺そうとするのか？ おれがもしおまえを充分に愛せていたら、その子を産ませていたか？ おまえと、コトノアを、2番目と3番目にしたのか？ コトノアを充分に愛するのやめていたか？ コトノアを充分に愛せていたらやがて来る悲しみからコトノアを解放したか？ 最初の日から？ ひとりにしたか？ いまからでもいかなかったことにはしたか？ 過去のコトノアの誕生を無かったこととするか？ ともしりや殺すか？

それともふたりともすか？ あるいはおれ自身か？ それがいちばんだろうか？  
どうか

してる。

「《透明拘束》<sup>クリアバインダー</sup>」セカイを縛る。「セカイ。おれはやはりおまえたちふたりがなにより大切だ。平等に」顎を掴む。口を開ける。《人甲虫説》<sup>変身</sup>を手向けるように傾ける。「すまない」セカイのくちさきが突き出し、震える。

「《技術破壊》<sup>テクニクレイク</sup>」

狂える怒り。飛び散った。放つ吐息が《人甲虫説》<sup>変身</sup>をカラスのように嗟嘆で枯らす。<sup>クリアバインダー</sup>「《透明拘束》<sup>クリアバインダー</sup>」も無理から死んだ。<sup>デーヴァボウチョウ</sup>「《天部膨張》<sup>デーヴァボウチョウ</sup>」セカイの駆動する出刃包丁。やばい。なにか。拘束。光速。梗塞。法則。止める。停止。呈し。手石。兵士。なにも。出ない。下手すぎる。さっきの。メタスキル。ダメだ。外せない。まるで働き蜂に刺されたみたいに頭が痛い。突き飛ばされ。キツチンのなかへ。「《腹上刺殺》<sup>スタブローギン</sup>」気付くと膨張。勃起。してる。さっきの。セカイはおれのズボンに手をかけ。ファスナーをおろす。トランクスのボタンすぐに外す、ぶりと呈す。ペニス。セカイはまたがり。はだかになり。それを挿入すると同時におれの胸に《天部膨張》<sup>デーヴァボウチョウ</sup>を挿入する。

「セカイ」

のどの奥からほとばしる濁ることば汁。

何度も。何度も。何度も。包丁。痛い。包丁。痛い。痛い。なにも。痛い。考え。痛い。られ。痛い。ない。痛い。

ああ。

なんだ。つけ？ 影。傘みたいな。顔だ。悲しそうに。歪んだ。顔。なんで泣く。泣くな。ああ。暗いな。ここは。雨が。ああ。はやく。助けないと。はやく。

セカイ

コトノア

襟撫

あい

息絶えた骸の上で腰を振っていたセカイはほどなくしてとまる。包丁の刺さった血まみれの胸に倒れ伏し、声を殺して泣いたあと、服を着、たちあがり、「伊藤」家から飛び出した。

雨が降っていた。暗闇のなか。どこへともなく。走った。4本の足で。4本の腕を振り乱し。走った。ただ走った。向かう場所はなかった。この街のどこにも家などなかった。やがて走るのもやめた。速度のなかにも安住の地はなかった。居場所はない。どこにも。ただ。セカイは居場所だった。腹を撫でた。

かすかに笑った。

男の子だろうか。女の子だろうか。考える。

男の子だろうか。女の子だろうか。関係ない。愛せると思った。

ペニスとヴァギナを撫でる。

さまざまな空想を脳に巡らしながら、歩くことさえ忘れ、とぼとぼ歩いた。

雨は気にならない。四臂四足の神の座標を与えられたセカイにとって、すべての自然は害にならない。

あてもなく歩く。

時計を見ていた。大きな時計。校舎の中央上部にある時計。気付く。時計を見ることに。何時間も経っていた。采配高校のグラウンドにセカイは立っていた。大穴のすぐ近く。そこがセカイの生まれた場所だった。そこに寝転ぶとあたたかな安心感に包まれた。右手の親指を咥えて眠った。

起き上って顔に付いた泥を拭う。あたりはまだ暗い。雨はやんでいる。

セカイはふと地面に目をおろし、紙切れを拾いあげる。

形代だった。3人でこの街を探検していたころ、離れて行動するとき真言が遣った連絡用の形代。

表面の泥をおとす。文字が書いてあった。

「屋上で待ってる」

セカイは見上げる。校舎のうえ。ちょうど見た方向に月が昇っていた。  
びよっ

と4本の足で飛び上がり、屋上に着地する。だれもない。ベンチに学校指定の鞆が放置されている。鞆に近づく。

「病院、いきましたか」

振り向くとコトノアがいた。

病院？

セカイは首を傾げる。意味がわからなかった。

「いいお医者さんなんですよ」

「いってない」セカイが口走る。そして目を見開く。

「どうしてですか？」

「あなたに紹介してもらった病院なんかいかない」セカイの口は彼女の意志に関係なく、不随意に動いていた。なにかの術中にあることは明らかだった。

「うそ」コトノアはセカイを見据える。「だからですよね？」

「え？」

「真言くんの気を引くために、赤ちゃんができたなんて、嘘吐いたんですものね」

「ちがうっ！」たとえ操られていなくても、セカイはそう言った。

「なにが違うんですか？」

「わたしは本当に！」

口走りながらセカイは考える。授業を思い出す。

**言葉遊びの主要な機能のひとつ、過去改変・現在改変・未来改変はここから生まれる。**

いま、コトノアがやろうとしていること。

過去改変。

真言を生き返らせることはできない。死んだ人間を生き返らせることはできません。だからこそ。もう真言の子種を胎に宿すことはできない。いまとなつては、セカイの腹の子はコトノアとセカイを隔絶する不等号そのものにはかならない。だから。

殺そうとしている。

なかったことにしようとしている。

真言と同じように。

殺させない。絶対に

セカイは考える。口は、なんらかのメタスキルに操られてる。どんな言葉遊びかもわからない。変更もできない。しかし口を止めても内語もあれば文字もある。言葉遣いの言葉遊びを止めるなら殺すか、眠らすしかない。

札をとりだす。真言にもらった札。まずこの口を止める。《死人に口無し》と札に書き、捨てる。相手はコトノア。変更されて悪用されるに決まってる。言葉遊びは慎重に選ばなければならぬ。

《マセシ》

これでいく。セカイは決める。口に斜線。これくらいシンプルなら改変しにくいはず。すくなくとも時間は稼げる、と踏み、札に書いて内語でルビを振る。

「真言くんなら——」

コトノアの表情が変わる。口は動くが、声が出ない。つぎの台詞が言えない。くるくるとあたりを観察する。目。漂うことば。セカイの手元の札から放散することばを読み取り、懐から自分の札を出してさらさらと書き、セカイに見せる。

《クチアシ》

セカイは呆気にとられる。捨てた「くちなし」さえも……。だれも。かれも。なにをやっても、変更の、餌食となる。いとも容易く。

「真言くんなら、そこにいますよ」声を取り戻したコトノアの整った笑み。「聞いてみたらどうですか？」

セカイは振り返る。ベンチの上の鞆。

ゆつくりと近付き、ファスナーを開く。真言のペニスをとりだしたときのように。息を呑む。

痙攣的に退がり、うずくまり、口元をおさえる。嗚咽がのどを締める。

腹の底から湧き出すおぞましきからのどの奥が逃げ出そうともがいて咳き込む。

コトノアがうしろにつく。

「西園寺さんの言ってること」

——検索完了。つぎのセリフは

「本当かどうか、確かめさせてください」

風が止まる。セカイとコトノア。ふたりの口からはなたれた同じことばがぶつかりあい対消滅。あとにはなにも残らない。コトノアが着々と構築した文脈も消え失せた。

ことばを失うコトノアをまえにセカイが口を開く。



あはっ。コトノアが笑うとセカイの腹がかすかに光る。

「スワフ・ログイン摘蟲視察」

もご。セカイの腹が急激に膨らむ。腹の中の胎児が一瞬のうちに何ヶ月分も成長したかのように。蛆虫、再ログイン。衝撃にセカイは嘔吐する。しかし嘔吐しながらも札を出

「ザ・ワールド《帝王世界》」

時が止まる。

そして。

「カイザー・ワールド《帝王切開》」

時は動き出す。

膨れ上がり浮き出た妊娠線に沿って、がぱっと、セカイの腹が盛大に切開される。

暗闇に包まれていた世界に光が差し、あたたかいセカイの肉と鮮血につつまれたおれの目にコトノアが映る。

切開された出口はせまく。視界はまるでヴァギナみたいだ。

セカイの腹に空いた虚をのぞき込み。虚ろな目でこちらに笑い、コトノアは言う。

「やっぱり。嘘だったんじゃないですか」

トト テ トン テ

「なかに真言くんがいますよ」

993

夕陽。照らす。海。浮かぶ。舟。

船上でやすらかによこたわるコトノアは首だけになったおれを抱く。

「やっとふたりきりですね。真言くん」



## エピソード

朝陽が昇る。

日の光差す屋上。

セカイが目を覚ます。

放心して腹を撫でる。裂けてない。すこし、膨らんでる。

腕と脚は、2本ずつ。

セカイは傍らに転がる出刃包丁を手にとり、自ら首を突こうとする。

ちがうよ。セカイ。

そうじゃない。

舟の上のコトノアの腕のなかでおれはつぶやく。

「真言……」

セカイ。すべて。計画通りだ。よくやった。おまえはちゃんと役割を果たした。

「いやだよ……真言お」

いいんだ。これで。

もうじき。おれは死ぬ。おまえは生きる。それでおれの《物語遊び》は完成する。

セカイ。おまえはエリナだ。

エリナ・ジョースターだ。

おれの希望だ。わかるな。

屋上で仰向けに空を見ながら、いまにも泣きそうな顔で、セカイが頷く。

おれにはそれが見える。

長かった。

ようやく。ここまで辿りついた。

諸悪の根源であり、船上で抱かれながら死ぬ生首のおれⅡ伊藤誠Ⅱディオ・ブランドー。

生首を抱きしめて船上で死ぬコトノアⅡ桂言葉Ⅱジョナサン・ジョースター。

身籠りながら船の外にある脱出するセカイⅡ西園寺世界Ⅱエリナ・ジョースター。

おれの描いたシナリオは、たんなる「スクールデイズ」じゃない。

『ジョジョの奇妙な冒険』第一部。最終話「忘却の彼方の巻」。

ことばとことばの偶然の一致じゃなく、ふたつの物語の偶然の一致を軸に構築した

《物語遊び》

「スクールデイズ」において死ぬ運命にあった西園寺世界Ⅱセカイを生かし、物語を歪めることで、エリナⅡ襟撫が生を得る道が開かれる。

物語を読み換えることよって甦る。

セカイ。さあ。あとすこしだ。

「……ん」

なんだよその泣きそうな声。ははは。唇ふるふるいつてる。はは。

セカイはいまにもあふれ出しそうな声を出す。

「あなたと伴に死にます」

エリナ・ジョースターのセリフ。

やってくれる。ってことだな。

死なない。ってことだな。

セカイは船上のおれにくちづけする。

あつけにとられた。そうか。そうだったのか。空を見上げる。いまにも落ちてきそうな無数の建物が空から、街から、生えている。その中央に采配高校の屋上がある。そして屋上から空を見上げれば青い海が広がり、その中央に舟がある。

屋上と舟は空を挟んで向かい合う。

「セカイ」

「なに？」

生きる。セカイ。

「初めての相手は常夏さんではないッ！ この真言だッ！——ッ」

セカイはわらう。

「ばか」

「お別れだ。セカイ」

目に涙をうるうる溜めながら、しかし気丈に、セカイは唇を噛んでうなづく。

「コトノア。おまえも」

「え？」

やすらかに生首のおれを抱いていたコトノア——腕がある——が怪訝な顔でおれの顔を見つめる。

「ちがいます」

「ちがわないよ」

くびをふる。コトノア。「間違っています。桂言葉は伊藤誠とともに、ジョナサン・ジヨースターはディオ・ブランドーとともに死にます。そうでないと——」

「コトノア」笑いかける。「わかっているはずだ。おれがおまえの名をコトノハではなくコトノアにした理由」

コトノアは悲しそうに黙って首を振る。「わかりません」  
うそだ。

おれはコトノアの名前を分解する。あつ、とコトノアが声を出す。

コトノア

←

コト ノア

そして自分の名前を変形させ、コト、を吸収する。

真言 コト

←

マコト コト

←

真 言

←

真言

これで、コトノアは、ノア。

「方舟だ」

ジョジョ第一部の最後。エリナは爆発する船のなか、デイオがシェルターとして持ち込んだ頑丈な箱に逃れることで一命をとりとめ、救助された。

「ノア。おまえはその箱だ。方舟だ。おまえ自身が Nice boat. なんだ」

ジョナサンの意志がエリナを救った。同じように、ノアがセカイを守りきり、生かすことによって《物語遊び》は完成する。ふたりは相補的ということだ。

「さあ」

ふたりは頷く。

コトノアがセカイを包み込み、空へ、あの街の屋上へ飛び立つ。

さよなら

999

そして最期。

これより神を召喚する。

生死を司る神を。

なあ。

あんた。これを読んでるあんた。

あんただ。

いまからあんたを召喚する。それが最後の詰めだ。これからあんたは見る。襟撫が甦った世界を。あんたが見ることによってはじめて襟撫は甦る。わかるか。

物語は神をひき寄せる。わかるか。あんただ。あんたはいまこれを読んでる。だが。当然だがおれがこれを書くのはあんたが読む前のことだ。これから続く文章もすべて。あんたが読む前に書いたものだ。これを書くことによってあんたを引き寄せたんだ。わかるか。

小説は不思議な時間性のなかにある。読む——時間的な線上に並べ直す——ことによって動作する記号の列が、空間的に、つまり無時間的、共時的に刻印される。それは時間を

いちど殺し、読ませることによってもういちど甦らせるということだ。読者は一度死んだ時間を生きなおす。読者に認定されることによって人は生を得る。わかるか。あんたが神なんだ。

では。はじめようか。

力 通 神 變 神 躰 行 元 天

アーメン

青 龍 玉 女 三 台 文 王 帝 久 勾 陣 白 虎 玄 武 朱 雀

アーメン

前 在 列 陣 皆 者 關 兵 臨

九字を切る

十字を切る

九字を切る

十字を切る

九字を切る

神。

九十九神じゃない。

九十九神。

あんたにお納めする。

九九九組の韻。

《物語遊び》。

いまから語りなおす、ことばたちの物語を。

いまから。書く。いいか。あんたがいままで読んできたこの物語を。いまからだ。九九

九組の韻を踏みながら。言葉遊びや物語遊びを交えながら。呪まじないながら。これまでに起こったことを。いまから。語りなおす。

語りなおすことよって。ズラす。

簡単に言つて、この世界は嘘だ。大きな欠陥。矛盾がある。

《倫理化》エチカによつて恋愛感情を完全に抑制された真言おれは、本来、こんな儀式を思い付きえないし、実行しえない。ありえない。これまで起こったことは。

しかし有意味でない文も、矛盾した文も、無数のことばの組み合わせのなかには含まれない。それが可能世界だ。つまりこの世界は、存在しない可能性だ。存在する世界のありえない可能性としてしか存在しない、世界の影のようなものだ。

不幸にもおれはそんな世界に生まれ落ちたらしい。ま。仕方ない。そういうこともある。

矛盾のない、本筋の世界では、真言おれは恋愛感情を失つたまま、だから襟撫を生き返らせる方法を思い付くこともないまま。ただ生きて、死ぬ。

そんなのは。いいか。くそくらえだ。おれはそんなものは認めない。たとえこっちの世界が偽物であろうと。いや。だからこそ。なぜなら言葉遊びとは結局のところ、「決して現前したことのない、そして今後も決して現前することのない『過去』や『未来』からの干渉だからだ。」決して現前したことのない、そして今後も決して現前することのない『過去』

とは、このことだ。この世界のことだ。この世界が偽物だからこそ、おれは本筋の世界に干渉する。変更できる。

わかるか。

まず。最初の一節で小学生の頃のおれの脳内の《倫理化》エチカをすこしだけ壊す。小学生のおれは襟撫のことがすこしだけ好きになる。その気持ちは次第にふくらみ。最終的に《倫理化》エチカを《淫靡化》エツチカする。でなければ。いまのおれはない。この世界は偽物のまま。

おれが書き換えることで過去はかわり。いまのおれへ到達する。  
本筋が移動する。

「ありえない可能性」と「現にあつたもの」が入れ替わる。  
光速よりも速く。

そしてさいごに。おれはこの世界を殺す。

本筋に移したこの世界を。

書くことによつて。

殺す。

これより 韻∥陰は 陽∥SUN∥散に転ずる。

言葉遊びは、ことばの選択を変える。意味やメッセージを伝えるためになら選ばれてい  
たはずのことばをはずし、音や形を優先させ、選ばれなかったはずのことばを選ばせる。

それはパラダイグム方向のシャッフルをひきおこす。

「真言は生きている」という文の「真言」の垂直∥パラダイグム方向の可能性空間には、  
そこに入りうる数多のことばが並ぶ。「犬」「蝶」「裁判」「日本」「ブラックマジシャンガ  
ー」もちろんそのなかに「襟撫」もある。言葉遊びが起こすパラダイグム方向の変換によ  
つて、「真言は生きている」は「襟撫は生きている」にかわる。過去現在未来を含めたこの  
世のすべてのことばに対してこれを行う。襟撫は生き。おれは死ぬ。

これがおれの

T<sup>N</sup>F<sup>K</sup>S  
《泰山府君祭》

どうや。

まいったか。

はは。

神。

もうしばしお付き合いを。

韻 version ははらばら流し読みでよろし。あれは献上する韻の目録みたいなもんや。  
重要なのは散 version ですが。これは短い。あともうちょっとの辛抱ですよってに。

さて

ほんなら



死にましょか

常夏さんとしあわせにな  
襟撫